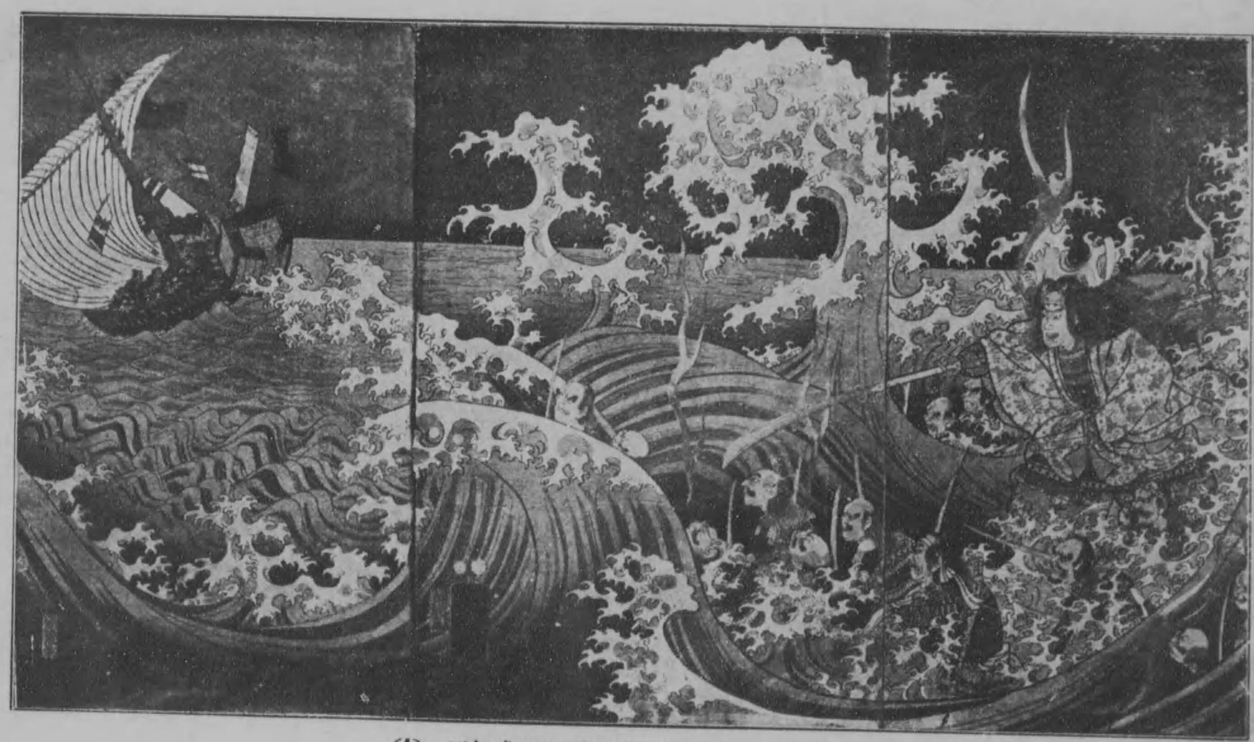
部

387
92

258
387-92

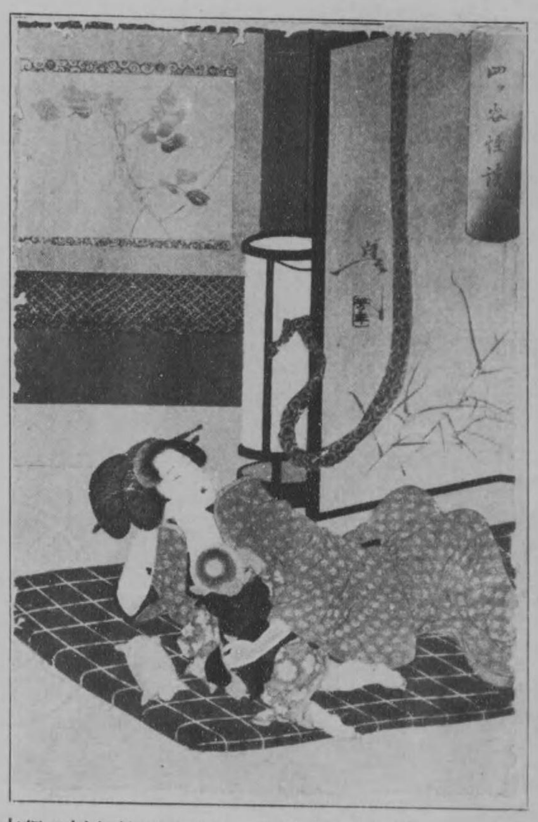
大正
8.12.15
内文



(I) 平知盛の亡靈義經を惱ます （第二十九頁參照）

（2）東洋の地獄觀（閻羅王母子の亡靈を問責す
第二九四頁參照）

執念



（4）左圖は近世の名力士小野川喜三郎が、古狸の怪を見現はす所　右圖は四谷怪談、

此の傳說心理
學を我が亡き
祖母つる子の
靈前に供ふ

序

『幽靈とおばけ』は我が手に由つて出る事となつた。幽靈やおばけは不思議なものであるが、しかも我が日本に於ける固有の傳說や童話をば系統を追ひて、科學的に解明したものが今迄さつぱり出て居らないのは、尙更不思議である。

勿論從來の刊行物中、外國物の飜譯や紹介、乃至其れを主題としたものならば別段珍しくもない。原文を讀める人には、益々陳腐である。余の此の著述は中心をば日本民族に置いたので、其の太古の神話より近代の傳說に至るまでを心理學的に研究して、其の發展の經過を說明したのである。

隨つて諸外國、諸蕃族の傳說をも參照すべきものは、成るべく多

く且汎く攝取した。

夫れ心理學の名を以て呼ばるべき科學は色々ある。各個人の精神活動を對象とする心理學以外に、人間の集團に於ける所謂群衆心理學、人間の社會に於ける社會心理學、各民族固有の心理經過を觀察せんとする民族心理學等、夫れ〴〵新興の學問として盛んに研究せられつゝある。しかも特に一民族と限らずして、單に之を人類的に其の太古蒙昧の蠻人時代より、近代文明の進歩せる情態に至る迄の心理經過を究めんと欲すれば、別に人類心理學なるものゝ興るべき筈である。又隨つて傳說や迷信の心理を對象とすべき學問も此の部門中の一分枝として存在の價値はある。

今、余がこゝに公にするものは、人類心理學中の一部と見るべき傳說心理學の大體である。しかも、材料多きに過ぎて、到底豫定の

一著述中に收め得ないから、其の前半の幽靈と怨靈と並に一般の靈魂傳說をば本書の主材とし、他の妖怪譚は時に應じて參照せしめたに過ぎぬ。更に筆を新にして、奇怪變異の百鬼千妖は、日ならず其の本體を諸君の面前に曝露されるであらう。

大正八年十月十一日

東京市本郷區追分町六四

高峰博

傳說
心理

幽靈とおばけ　目次

第一篇　古今東西の幽靈研究

緒言……一
〔餘白〕うしろがみ……二

第一章　幽靈の歷史と未開人の幽靈

一　幽靈の定義と魄靈の語義……三
二　幽靈の歷史……一〇
三　布哇土人の幽靈……二〇
四　我が國中世以後の幽靈……二六

五　以上の結論と卑見……四一
〔餘白〕　もののけの歌……四二

第二章　幽靈の實在

一　事實と見做し得る幽靈……四三
第一例　子供の幽靈……四四
第二例　死出の暇を乞ふ幽靈……四五
第三例　早曉訪れ來る青年……四九
第四例　親友の幻影……五一
第五例　婚禮の夜生靈となる……五四
第六例　幼女從兄の水難を知る……五六
第七例　亡靈、竹馬の友と會談す……五八

第八例　幽靈屋敷……六〇
二　幽靈現象の心理學的解釋……六一
參考例第一……六六
參考例第二……六七
參考例第三……六八
三　病的の妄想妄覺に因る幽靈……七二

第三章　幽靈傳說の心理

一　近世の代表的幽靈……八〇
二　幽靈思想の基本觀念……九〇
三　靈魂思想の諸學說……九二
〔餘白〕　日本幽靈の額烏帽子……九五

第四章　幽靈譚集

一　傳說としての野蠻人乃至文明人の幽靈……九六
(一)　外國の幽靈傳說……九六
1　復讐を望む幽靈(スコットランド)……九六
2　布哇人の幽靈發見法……一〇二
3　父、子の靈を尋ねて幽靈國に至る……一一一
(布哇人の考ふる冥界の情況)
4　幽靈國の見物……一二〇
(二)　日本の幽靈傳說……一二九
1　詞をかはせし磔女……一二九
2　慇懃なる幽靈(一夜船より)……一三一

3　成田治左衛門與二亡妻一同枕衾一……一三四
4　菅丞相比叡山に法性坊を訪ふ……一三八
5　亡魂改葬を願ふ……一四〇
6　菊花の約……一四三
(三)　いろ〳〵の幽靈型式……一四八
1　白川なにがしが家の事……一四八
2　影の如き騎馬の人(遠野物語)……一五二
3　狐精鬼靈寃情を訴ふる話……一五一
4　ハムレットの父王の幽靈……一六七
5　童話としての幽靈……一七一
6　馬に乘つた幽靈……一七五
7　鏡と反魂香……一七七

二 幽靈屋敷……一七九
1 はたごやの幽靈(夜窓鬼談より)……一七九
2 黑衣の幽靈……一八二
三 動物の見る幽靈……一八五
四 幽靈の影響……一八八
五 特種の幽靈……一九〇
1 うぶめ……一九〇
2 胎兒の幽靈……一九四
3 船幽靈……一九五
(一) 武文の怨靈……一九六
附、世事百談の記事……二〇八
(二) はりまの沖の舟幽靈……二一〇

〔餘白〕 キリストの幽靈……二一一

第二篇 野蠻人の靈魂觀念

第一章 原始人の對自然觀
一 未開人の靈魂觀は即、彼等の自覺史なり……二一三
二 原始人の心理は幼兒の夫れと比ぶべし……二一六
三 人格的自然觀……二一九
〔餘白〕 佛敎の輪廻思想……二二四
第二章 原始人の死生觀
一 轉生觀念……二二五

(一) 死亡後の轉生……二二五
(二) 忌避思想……二三二
(三) 出生に對する觀念……二三七
(四) 前生觀念……二三八
二 異族種觀……二五三
〔餘白〕 生殖器崇拜に就きて……二六一

第三章 未開人の自然物崇拜

一 動物崇拜思想……二六二
二 植物崇拜思想……二六五
三 無生物崇拜思想……二七〇

第四章 未開人の靈魂思想

一 體魂觀……二七五
二 眼妖觀……二八一
三 生殖器崇拜……二八四
四 魂魄觀……二九〇
(一) 靈肉二元思想の發生……二九〇
(二) 多魂と單魂……二九二
(三) 魂魄の情態……二九五
1 魂魄觀の實體的と陰影的乃至無形的……二九六
2 動物形の魂魄……二九六
3 陰影、精氣的の魂魄……三〇八
五 靈魂の座所……三一三
六 靈魂の遊離——離魂病……三二四

七　無象的の魂魄……三二一
八　憑依思想並びに偶像、遺物祖先に對する觀念……三三七
〔餘白〕　其の一　印度傳說の前生觀念……三四一
　　其の二　反魂香のこと……三四二

第三篇　怨　靈　論

第一章　怨靈の傳說心理

一　怨靈の定義と其の思想の發生……三四四
○傳尸讓去（お伽婢子より）……三四六
二　怨靈の歷史（上）……三四九
○賴豪鼠となる事……三五一
○守屋塚木鳥となる事……三五四

○崇德院の御事……三六四
三　怨靈の歷史（下）（怨靈傳說集）……三六五
○道成寺……三七五
○陰摩羅鬼……四〇八
○孝子の魂魄鷄と成りて父母に福を與へたる話……四〇九
四　以上の結論……四一一
〔餘白〕　心疾と幽憂之病……四三三

第二章　怨靈及び輪廻思想

一　陰　火　論（上）（其の起源）……四三四
二　陰　火　論（下）（諸外國の傳說比較）……四四八
三　化物屋敷……四五三
四　たましひ入れ替りの傳說……四五六

1 生ける甲乙二者の魂が交換せらるゝこと……四五七
2 甲乙二人時を同じうして死し、魂が入り替りて蘇生す……四五八
3 甲の亡魂が乙の屍體に入りて蘇生すること……四五九
4 歸還すべき肉體を失ひし生魂が他の屍體に寄ること……四六三
5 亡魂が一時生體を借ること……四六四
○累の怨靈……四六六
6 鬼神の類と人魂とが入替ること……四七二
〔餘白〕もののけの俳句……四七三

結論

〔餘白〕關尹子、陔餘叢考、列子より……四七九

索引

記事人名書名

……四七九

挿繪目次（二十六枚 四十五種）

平知盛の亡靈、義經を惱ます……卷頭
東洋の地獄觀（閻羅王、母子の亡者を問責す）……卷頭
執念とお岩のおばけ……卷頭
四谷怪談と小野川の勇猛……卷頭
『ぶる〳〵』と『幽靈』……二
『もののけ』と『うなされ』……一六
死りやうと生きりやう……四八
小傳法庄吉と松若……七二
小幡小平次の亡靈……八〇
牡丹燈籠（北齋の筆）……八〇
座頭の文彌と水死の魂魄……九〇
雨女郎と雪女郎……一四八

牡丹燈籠の繪二つ（北齋及び芳年の筆）……一四八
宗玄火とうぶめ……一九〇
西洋と日本の船幽靈……一九四
西洋の地獄二つ……二三四
布哇土人とアイヌ人の神像……二三六
小幡小平次とろくろ首（北齋筆）……二三六
古代埃及人がミイラ製造する光景……二三六
地獄に於けるナポレオン……二四二
お岩と節婦の靈……二四四
らいごうの鼠と守屋の寺つゝき……二五四
番町皿屋敷、お菊の怨靈……二五八
新田義興の怨靈……二六四
實方の入内雀と清姫……二七四
塙團右衛門と卜部季武の武勇……四五二

傳說
心理

幽靈とおばけ

醫學士　高峰博著

第一篇　古今東西の幽靈研究

緒言

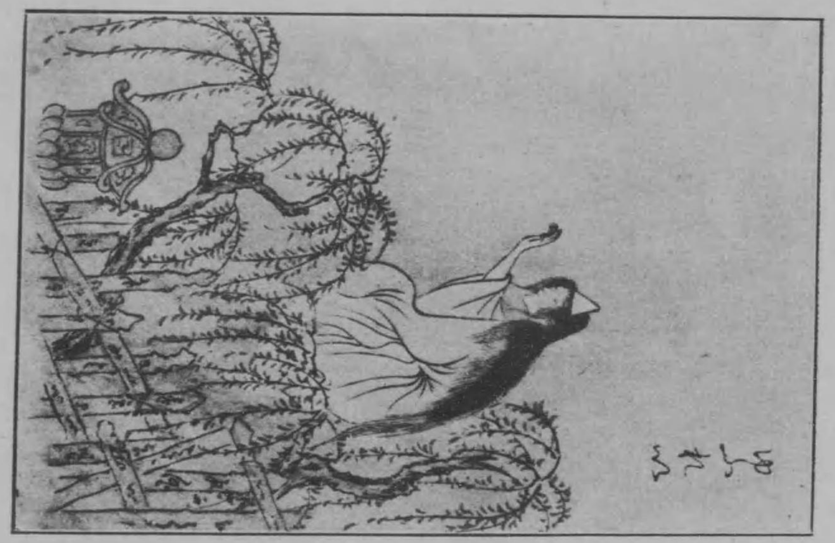
おばけの世界、幽靈の國を探險しやうと思ふ。これ我等は未だ天地の性に明かならざるが故に、愈々神怪を探らねばならず、又未だ萬物の情を知らざるが故に益々非類をも究めねばならないからである。怪力亂神は最、不自然の如くにして、しかも人性に甚親近なものである。我等が妖怪世界と交渉があるからこそ、我々は他動物の知ら

ざる神秘さを感知することが出來、又我々は妖怪に由りて、人性其のものを知るすべともなる。而て實におばけは人の老若尊卑に拘らず一樣に、聞き知らんと欲する所であるから、本書は右の孰れの欲求者に對しても多少の滿足を與へ度く思ふ。

就いては、妖怪變化のものといつても、順序としてまづ最も人間的若くは人間臭のある怪物、即幽靈をば第一番に述べて、次に傳說上の靈魂觀、それから怨靈や死靈、生靈の話に移つて前篇を閉ぢ、更に筆を新たにして愈、奇々怪々のおばけに及ぶ事にしやう。

うしろ髮　山東京傳

ちつくしき顏に亂せしうしろ髮
長きためしにひかれてぞ行く。



第一章　幽靈の歴史と未開人の幽靈

一　幽靈の定義と魄靈の語義

南無幽靈成等正覺。出離生死頓生菩提。苦を守つて夜月に飛ぶてふ幽魂は果して有りや。はた屍を失ひて秋風に嘯くらん愚魄なるもの本來無しや。いでや一道の光明と而て一大疑團とを讀者の面前に投げてみやう。

抑、幽靈は所詮「妖怪」中の一類ではあるが、しかも古來「おばけ」と並び稱せられて人心を支配すること寔に甚大なものである。これ其の前身が人間たりしもの丶「變化」として、妖怪世界の一大國を成してゐるからで、余も本篇には特に幽靈のみを研べて見やうと思ふ。

然らば幽靈とはどんなものか？——宵からの雨が劇しくもならず止みもせでショボ

〳〵と降つてゐる。川邊の柳は重たく枝垂れて小暗き闇みの中に魔の城の如くに眞黑く際立つてゐる。サアーッと腥い風が吹き渡つて、枝々葉々相ひ觸れて、雨滴はバラ〳〵と水面に落ちる。水の面か、はた岸の上か、さだかに見え分かねど、かなたの眞闇い處にポーッと青白く火の玉が立ち昇る。と其の火明りの中に髣髴として痩せこけた姿が幽明の境を超えがてに、一入の物凄さを以て、暗の奥に浮き現れる——かういふのが我々の物語や、畵工の構想に現れる最、定型的な幽靈である。けれども勿論各時代各人種によつて其の概念も悉くは同じでない。其共通的なる觀念を捉へて旁々語義上の誤解や、錯誤を防ぐ爲に、大體其の意義を豫め規約しておかう。曰く、

「所謂幽靈とは、其の傳ふる所を綜合すれば、主として人間の靈魂が其の固有の肉體的關係を離脱して、時處の羈絆無く、他人の感覺界殊に視界に現るとなす所の幻影的超自然物」である。

而て大體に於いて、生靈よりも亡靈が多く、亡靈中でも不自然死を遂げし者に於

いて多く、小兒よりも成人に多く、形體は殆、常に其の平素の特徵を保留して、たとひ無慙の姿なりとて、一見其の何者なるやを認識せしめ得べく、時は多く陰暗の機を選び、其の出現する所の對象者は主として、幽靈たるものゝ近親者乃至怨敵にして、其の目的は自己の殘念とする所を示し、又は以て崇らんとするにあるが如し。之を以て所謂、幽靈の定義とすれば、まづ大體に鵠に中れるものと余は信ずる。——尤も讀者の中には上述の定義に對して多少不滿に思はれる方もあらうが、それは後文に追々と卑見を陳じて余が然か思ふ所以を明かにする際、高敎を仰ぎ得る事と思ふ——そこで取り敢へず辨じておくべきは夢の心裡に亡靈が出現して怨を述ぶる如きは余は夢の一種として取扱ひて幽靈とはせず。又人間以外の動物なりとして、愛犬、愛鳥の類の殆、其の心情、人間的の細かさありしものゝ幻影は幽靈とすれども、單に奇態變形の怪物たるに至つては、植物乃至器物類の變化と共に一樣に「おばけ」として取扱ふを至當と考へる事である。

次に幽靈なる文字は文選に謝惠連の祭二古冢一文として、幽靈髣髴歆二我犧樽一と言ひ、我が國でも、今より六百四十四年前の日蓮の文なる「法蓮鈔」には、

「今、法蓮上人の送り給へる諷誦の狀に云、慈父幽靈第十三年の忌辰に相當れり云々」

ともありて、其の原義は必しも上記の如く、感官上に現るゝ幻覺の種類ではなくて、單に幽冥の世界へ去りし神靈を抽象的に呼びしに過ぎない。而て我等が用ゐる幽靈の語には大體上掲の如く、もつと具體的の意味も有つてゐるのである。

然らば我が國では何時頃から此の語を左樣に用ゐ始めしか？　蓋し、室町幕府時代、謠曲が流行し出し、而て其の文中に頻々此の語を用ゐしより、自然と、人の腦裡に印象深くなり、いつかは三歳の童兒も、此の六づかしき漢語を一聞して恐ろしきものと感ずるに至つたのであらう。又實に平安朝時代には、未だ此の文字を使用せず、たゞ「もののけ」として云ひ表はれてゐる。次の源平以後南北朝の頃は怨靈、亡靈の語多く、

鎌倉乃至室町の幕府時代には己に幽靈の語は屢々用ゐられるやうになつてゐる。尙此の事は、別章に幽靈の歷史を說く際、詳述しやう。

但、こゝに附言すべきは幽靈に對して魄靈てふ文字のあることである。これ漢文では「魄」は「魂」に對して特別の意義ありとせられるので、我々こそ、通常「魂魄」と續け呼んで「たましひ」「靈魂」等の意に意ゐてゐるが、元來、兩者の意味は左の如くである。即淮南子には「天氣を魂となし、地氣を魄となし」以て魄は陰、魂を陽とし、杜預は注して「魄は形なり」とし隨つて新井白石は「人の知覺は魂に屬し、形體は魄に屬す」と論じて、魄は要するに、精靈の氣の凝りて形體的となるを云ふものゝ樣である。されば謠曲「實盛」の中には「われ、實盛が幽靈なるが魂は冥途にありながら、魄は此の世に留まりて」と云ひ、又「生田孰盛」には「幽魂」に「愚魄」と使ひ分けてある。かくして謠曲文中には所々に「魄靈」の文字を使用してゐるが、左に其の例を擧げて見やう。まづ「經政」の末段の文句に

「さきに見えつる人影のなほ顯るゝは經政か」「あら恥かしや我が姿。はや人々に見えけるぞや。あの燈火を消し給へとよ。……あの燈火を消さんとて、其の身は愚人夏の蟲の、火を消さんと飛び入りて嵐と共に燈火を吹き消して、暗まぎれより魄靈は失せにけり。魄靈の影は失せにけり。」

又「籠」には

「御身貴き人なれば法味を得んと魄靈の魂に移りて、來りたり。」

又「知章」には

「あら有難の御弔ひやな。われ修羅道の苦みの隙なき内にかくばかり魄靈にひかれて來りたり。」

それから「松蟲」には

「あら有難の御弔やな。秋霜に枯るゝ蟲の音聞けば、閻浮の秋に歸る心。猶、郊原に朽ち殘る、魄靈是まで來りたり。うれしくも弔ひ給ふものかな」

とある。世人は「幽靈」なる語にはよく馴れてゐるが、「魄靈」といふ事は滅多に無く、又謠曲に於いても、余の觀世流本に據りて調べたる所、内外別二百番中幽靈出現の趣向をなしたるもの六十一種、又其の中では、勿論「幽靈」や「亡靈」等の文字は屢々使用せられてゐるが、魄靈の語を用ゐしものは、僅か上掲の四種のみである。即、當時に於いても餘り普通の言葉でなかつたと見える。所でこれは丁度英語のゴースト(Ghost)といふ語のスピリット(Spirit)に於ける如き關係と見れば甚解し易い。一體スピリットは精氣、神靈等の意で純粹に無象靈氣的のものであり、ゴーストは之に反して、たとひ幻影的ながら多少形態を有する靈體の事である。素より時には相互に流用せられて嚴格の區別の守らるゝわけでないが本義はさうである。然るに我が國語に飜譯すれば、現代語を以てすると、どうしても幽靈がゴーストに對し、隨つて、スピリットの譯語としては、精靈とでも言はねばならなくなる。けれども、上文引用の如き語義を以てすれば、幽靈なる語は寧ろスピリットの譯として適し、魄靈がゴーストに當

るやうである。時代と共に語義の變遷のあるが上に、魄靈てふ文字が左迄一般には用ゐぬものであるから、強ち異を立つるにも及ばないが區別を設ければ、右樣であることを一言しておく。言語上の詮索はまづこれ位にしておいて、以下に幽靈史を說かう。

二　幽靈の歷史

時代と共に思想は複雜となる。文明と共に其の傳說も分化する。靈魂不滅の思想が重要なる要素を成せる所の此の幽靈に就きても、縱に之を時代的に觀れば追々其の分化變遷の跡を知り得る。即我が國の神代には殆、幽靈の思想は無かつたらしい。尤も、彼等は靈魂の不滅を信じた。けれども現世に於ける死者は其のままに黃泉國に到つて生きてゐるのである。別に生前と死後とに大なる變化を考へず、隨つて後世に於ける如き幽明境を異にしながら、怨恨妄執の爲に幻影の如く現れ出づる所の幽靈とは、其趣きが違ふ。左にまづ古事記から例を引いて說明しやう。

「かの伊邪那美神は、火の神を生みしが爲におかくれになつた。夫の君、伊邪那岐神の愁嘆悲泣は非常にして、其の戀ひしさの餘り、自ら黃泉國に來て、妹の君に面會を求められた。此の時、女神は

『あゝ殘念なこと、もつと早く迎ひに來て下さればいいに。私はもう黃泉國の穢れたからだとなつてしまひました。でも兎に角もう一度元との鄕へ還れるか、どうか此の國の神樣に相談して參りませう。其の間どうぞここにお待ち遊ばせ、決して覗き見なさつてはなりませぬ』と云つて奧へ入られた。男神はそれも待遠しくて、一寸內を竊み見すると、こはまた如何に！慘澹無慙の姿、蛆蟲が一杯グヂャ〳〵たかつて頭の皮もとろけ、胸や腹の肉たゞれて腐爛した臟腑があたりに流れ出てゐる。オヤッと目を廻はして飛び出し、あとをも見ずに逃げ返へる。女神は、ええ悔やしや、此の姿を見られたか、こんな恥ぢを見せられては默つて居れぬ。とて、泉津醜女を始め、徒黨を語らうて追ひ來る。伊邪那岐神は之を禦ぎ留むべく、或は櫛を投げつ

け或は桃の實を打ち投げつつ、黄泉比良坂まで遁れ來り、千引の石を障屏として今や追ひ付きし伊邪那美の神に相ひ對す。女神は『あなたが斯樣のしうちを遊ばすから其の腹癒せに一日千人の命を取りますぞ』といふ。男神は『それなら我は一日に千五百人を產ませやう』と。かういふ口論の揚句、やつと伊邪那岐の神は死の國の神々から免れることが出來た。」

讀者は、此の神話に由りて、死者たる伊邪那美尊の言動が、生者の夫れと區別もなく又其の屍狀の醜惡なる事は描いてあるが、併し一向後代の所謂幽靈の樣な姿は想像することも出來ぬ。これ寧ろ生と死との區別的觀念が朦朧として、天高原を神さりて黄泉國に移轉したくらゐにしか考へて居らぬと見える。現に未開人の葬式には大に號泣もするがまた面を被き鉦鼓を叩きて、他から見れば甚陽氣な儀式を行ふ所もある。これは其の他國行をにぎやかに餞けするといふ意味ださうで右の神話もそれと同思想の如く死者も甚、活潑に行動する、否、男の生者が逃げ出せば、女の死者は徒黨を組んで追つ掛け追つ掛け喧嘩すると云ふ騷ぎである。とても、うらめしや、ヒユードロ〳〵の幽靈なぞは、どこからも出さうにもない。尙他の例證として天若日子を射殺の話がある。其の大意は、

「此の葦原の中つ國が亂れてゐたから、高天が原では天照大神初め群臣凝議の末、次ぎに使者を派遣して降伏平和を勸めることとなる。先づ天若日子が命を帶びて天降りしも遂に復命せざるのみか、剩へ第二使者鳴姫を射殺した。ここに高木神「其の矢を取らして、其の矢の穴より衝き返し給ひしかば、天若子が胡床に寢たる高胸に中りて死せにき——此の時阿遲志貴高日子根神來まして、天若日子が喪を吊ひ給ふ時に、天より降り到つる天ノ若日子が父、亦、其の妻、皆哭きて「我が子は死なずてありけり、我が君は死なずてましけり」といひて手足に取り懸りて、哭き悲みき。其の過てる所以は此の二柱の神の容貌、甚、能く似たり。故、是をもて過てるなりけり」

といふ、讀者よ、若し此の話が後世のものならば正に「妻子は夫の幽靈が來たかと驚いた」と書くべき所である。神代には隱身の神や、神靈の夢告や奇蹟的の諸神產出等の物語はあるが、まだ後代の所謂幽靈は出なかつたのである。强ひて、之を索めるとしても、かの伊邪那美命の黃泉比良坂まで追ひ來りし事が後世の幽靈思想の萠芽なりと云ひ得ひ得るに過ぎない。然らば、日本では何時の時代に始めて幽靈が出現したか？　支那や印度の思想の入つてから後で其の形體を結ぶに至りしは、平安朝の頃かと思はれる。尤、人もよく引く例として、萬葉集の卷の十六に「人魂の眞靑なる君がただひとり、逢へりし雨夜は久しく思はゆ」といふのがある。これは「人魂の如く靑白い所の君」として、實在の人の容貌を形容せりとすべきか、はた「人魂のさをなる君」を以て幽靈其の者なりとすべきか、其の歌意は末句と共に甚解し難いのである。桂林漫錄には、後の解を取りて、「唐山にて鬼と云ひ、女の幽靈を女鬼といふ。――和訓にはひとだまのさをなるきみと云ふべき」とある。本居宣長は「人だまはさをの枕

詞にて、色靑き人に逢へるを云へるか」といふから、前者の說に當る。而て原文には「怕物歌」とあるから、孰れにしろ「人魂」乃至「幽靈」の思想は此の時既に存したりし證據となる。而て傳說中に現れしは、一千年前の菅公の怨靈が、まづ最も古いものの一である。詳かなるは北野緣起等に書かれ後には謠曲の「雷電」などに謠はれて甚人口に膾炙されてゐる。左に便宜に從ひて和漢三才圖會の文を引用して見ると、

尊意(當時の延略寺座主)在二叡山一一日菅丞相來語曰我已得二梵釋許與一欲レ償二夙對一願師道力勿レ拒レ我也。意曰然然卒士者皆王民也、承二皇詔一所レ辟乎菅氏作レ色適薦二柘榴一菅吐レ哺而起化作レ焰坊戶煙騰意結二瀉水印一擬レ之其火即滅燒痕尙在焉。

是は道眞の死後間もなき事件として傳へられ、又其の時の公の姿は衣冠束帶にして正に其の幽靈であつたのである。

然るに今より約九百十年前(一條天皇の御代)に著されたといふ紫式部の源氏物語の

夕顔の卷には明かに後世の所謂幽靈なるものが現れてゐる。即、

光源氏が私かに新らしき戀人夕顔と睦び語らうやうになりて、或夜、源氏の邸に二人相ひ臥した。時に源氏の枕頭に美しい女が立ち現れて、其の無情を怨み責める。これは六條の御息所の怨靈である――と見て目を醒せば一塲のうなされであつたがしかも燭臺の火は消えて、夜暗、愈々沈たり。「紙燭さして參れ」と手を叩けば、ひろ〳〵したる室内は陰に響きて山彦返す有樣にほと〳〵物に氣取られて氣恐ろし。やがて燈火のまゐりたれば、近く召し寄せ給ふに「唯、この枕がみに夢に見つる容貌したる女、面影に見えて、ふと消え失せぬ。昔物語などにこそきけと、いと珍らかにむくつけけれど、まづこの人いかになりぬるぞと思ほす心騷ぎに身の上も知られ給はず、添へ臥して、ややと驚かし給へど、ただびえに冷え入りて、息は疾く絶え果てにけり。いはんかたなし。」

右の文中にも、幽靈とは無いが、夢にも非ずして、燈明に伴うてポーッと現れしは

幻女は幽霊であつたといふべく、しかも側へに臥したる夕顔の上が此のものけにおびえしめられて、息絶え果てし如きは正に後代の幽霊と同一種のものである。而て、上掲の文に於ける如く「昔物語などにこそ聞け」とあるから、かゝる幻影に關しては、既に此の藤原時代には、「もののけ」などと呼びて弘く世俗に云ひ傳へられしものと見える。されば、「もののけ」なる言葉は、其の他、紫式部日記や、蜻蛉日記等にも頻々出て來るので、就中、嘉承二年に堀河天皇、御重病の節、數多の山の久住者や高僧どもを召されて「物のけ」を駈り移はせ給ふ御模樣をば讃岐典侍は其の日記に書き記して、

「斯樣にいみじき人たちあまた侍ひて、我も劣らじと祈り參らせらるゝけにや。御物怪あらはれて、りう僧正（註に曰く、西大寺の座主、大僧正良眞）賴豪（延暦寺の僧にて戒壇設立の議容れられざりしか憤りて餓死せし者）など名のり罵る人あらはれさせ給うて、一年の行幸の後、また見まゐらせばやと床しく思ひまゐらするに、其の德なければ、驚かしまゐらするぞといふを聞かせ給ひて」

とある。これは今（大正八年）から八百十二年昔のことで、蓋幻聽の類と同時に幽靈の幻視ありしことゝ見ゆ。否、現に平家物語の卷第三には

「賴豪、終に干死に死にけり。去る程に皇子御惱附かせ給ひて、打ち臥させ給ひしかば、樣々御祈り共有りけれども、叶ふべしとも見えさせ給はず。白髮なる老僧の錫杖を以て、常は皇子の御枕に彳むと、人の夢にも見え、現にも又立ちけり。怖ろしなども恐か也」

といふ。——又、源平盛衰記には賴豪の怨靈が化して無數の鼠となりしとの傳說あれども、本論とは無關係故、今こゝには略する。別篇、怨靈論を見られよ

かくして亡靈思想も漸く鮮明となり、約八百五十年程前の源隆國の「宇治拾遺物語」にある「河原院に融公の靈住む事」は其の好例である。曰く、

「今は昔、河原院は融の左大臣の家なり。陸奥の鹽竈の形を作りて潮汲み寄せて鹽を燒かせなど、樣々のをかしき事を盡して住み給ひける。大臣うせて後、宇多院に

は奉りたるなり。延喜の帝度々行幸ありけり。まだ院の住ませ給ひける折に夜中ばかりに、西の對の塗籠を開けて、そよめきて人の參るやうに思されければ、見させ給へば緋の裝束麗しくしたる人の、太刀佩き笏を取りて、二間ばかり退きて畏まり居たり。あれは誰ぞと問はせ給へば、こゝの主に候ふ翁なりと申す。融の大臣かと問はせ給へば、然か候ふと申す。さは、なんぞと仰せらるれば、家なれば住み候ふに、おはしますが辱く所狹く候ふなり。いかゞ仕ふべからんと申せばそれは〳〵異樣の事なり。故大臣の子孫の我に取らせたれば住むにこそあれ。わが押し取りて居たらばこそあらめ、禮も知らずいかに斯くは怨むぞと、高やかに仰せられければ、掻い消つやうに失せぬ。其の折の人々、猶、帝は將、殊におはします者なり。たゞの人は其の大臣に逢ひて左樣にすくよかには言ひてんやとぞ云ひける」

これらの文に據りて案ずれば、まづ我が國の幽靈は、藤原時代の初期にははや存在したと思はれる。

三　布哇土人の幽靈

幽靈思想の成熟は之を既に藤原時代に見出すが、さてそれまでの分化經路に關しては、我が民族の傳說上には之を徵すべきものがない。尤も源平盛衰記には、物部の守屋の怨靈が數千羽の啄木鳥となり、聖德太子は鷹と化して之を降伏せしめたなどとの傳說が書いてあり、其の他一條帝の御代の藤原實方が入内雀になりし事など、此の種の話は其の例に乏しくないが本篇の幽靈論の材料にはならぬ。

余が前節に論じたる如く、日本神代には幽靈思想無く、而て此の神話時代は無論人皇史中にも或は白鳥に化し或は蛇體を現じ乃至禽鳥と變じたる傳說、即變生思想はあるが、しかも尙平安朝に至る迄の一千五百年間に幽靈が無かつた。

併し乍ら、これは文獻上に見えぬといふだけで、民族心理の發達上には此の間の中間型が必ずや存する筈である。而て余は之を多くの他の現存未開種族の信仰中に指摘

し得る。例へば、フレイザア Frazer 氏に據れば、ニウギニアのコイタ Koita 族は彼等の仲間の亡靈は山上に於いて、あらゆる人間的の生活をなすと考へる。即飲食結婚耕田等を行ひ、果ては死亡するのである。又カイ (Kei) 族は、地下に亡者の世界ありとし、同じく人世の萬事がこゝでも營まるとなす。而て、其の人世と別異の點は、すべて陰影的なるにありといふ。これと丁度同じ思想をばウエスタアヴエルト氏は布哇のマウイ (Maui) 島土人にあることを書いて居る。余は後文に「幽靈國の見物」と題して其の傳說を譯出したから參看あれ

又同じくフレイザア氏はオーストラリア南部のナリニエリ (Narinyeri) 族が、亡靈は深夜來りて、さつと火を消し、人々を殺し、又浮かばぬ亡者の爲に繩を以て捕縛せらると信ずることを述べ、ホウイット Howit 氏は同じくオーストラリアの未開人中には、夢中の幻影は勿論、覺醒時にも墓邊に死者の姿を幻視して之を幽靈なりとし、又、巫醫乃至呪願師は此の種の幻影を見ると信ずる由を記載してゐる。

尙余は左に布哇土民の幽靈思想を紹介しやうと思ふ。

古來、布哇人は死者の靈魂に關して、三種の分類をしてゐる。其の一はアオ、クエワ（Ao-Kuewa）其の二はアオ、アウマクアス（Ao-Aumakuas）それから、其の三はアオ、オ、ミル（Ao-o-Milu）である。而て其の第一類は云はば無緣佛といつた樣な幽靈で生前既に家なく財なく、隨つて亡者仲間でも其定住すべき位置を見出し得ずして誰か他の亡者共の援助の見付かる迄はフラ〳〵迷うて居らねばならぬのである。第二類は我等が所謂、祖先の魂魄といつたやうなもので、日本神代史中の神々はまづ此れに當る。彼等は通常其の子孫の家居の近所に在りて、絕えず之を冥護してゐる。隨つて、布哇人等は之を崇拜するのである。第三類は、いはゆる佛說などに謂ふ所の閻魔大王の配下に於ける亡者の如きもので、實に「ミル」といふ言葉は下の國、即、冥界の首長にして、ポリネシアの大部分を通じて信せらるゝ思想である。さればミルは閻魔の樣なもので、往々また「ミル」の語を以て冥界其の物を意味することもある。而て前述

二類の亡者も修業を積み重ねて此の王廳に來り、こゝに定住してゐるのである。右の布哇語中孰れにも「アオ」といふ字があるが、これは「神明」の意もあり、又「衆多」の意もあつて、つまり彼等亡者は下の國に澤山集合してゐると思ふ點は、猶、我が神話に高天原に八百萬神ゐませりと考へしと同じである。又必しも常に此の三種の區別が截然たるに非ずして、屢々相混淆して考へらるゝこともある。又面白いのは肉體を離れし魄靈が下方の黃泉國へ旅行すと稱せらるゝ道筋は幾つもあるが、其の孰れも、亦布哇人もポリネシア人も皆、其の方向を西方に取つてゐる。我々が之を聞くと、直ちに西方十萬億土の西方かと思ひ度くなるがニウジーランド島土民傳說の研究者は彼等の祖先が西方より渡來せし故に、死すれば其の祖國に還るとの思想であらうと說く。さうでもあらうが、又、同時に日沒處の西方なることが心理的に如是思想を誘ふ要素であらうと思はれる。さて其の冥土への道筋は布哇語でレイナ、ア、カ、ウハネ（Leina-a-ka-uhane）即、亡靈の跳び渡る口といひ、いつも上述の如く西海に臨める絕

壁で、亡者も此の崎へ來て、且之を越えることは中々六づかしいが一旦、さうして死者の國へ着いてしまへば、もうもとの古巣には戻れないといふ。此の關所の如きレイナ、ア、カ、ウハネと關聯して麵果樹もまた亡者には一の集合所となつてゐる、此の邊の思想は佛家の所謂、三途の川だのに比ぶべく、又、神代史には黃泉國を境する黃泉比良坂がありて、しかもこれが、地理上には伯耆國に於いて指點せらるゝが如く、又、神々の居る高天が原を、下方の「根の國」に對して、「上つ國」と稱へ、乃至、こゝにも又、「天の安河」なる川があつて群神參會の地點たりし由の如き、其の他、祖先のものが常に必しも「根の國」「黃泉國」には行つてしまうのでなくて、「高天が原」に昇つてゐる如き、實に余が始めに述べたる通り、死者も生者の如く亡き祖先も永刧に活動してゐる如く、夢幻の如く、實在の如く、何とも判然する所のない有樣は、右の布哇土人の信仰と同じである。しかも後者には、同時に亡靈に對して、我が古代人が有せしよりも、もつと明瞭な形態を想像してゐる。換言すれば所謂幽靈らしき姿を思

念してゐる。何となれば、彼等は語りて曰く、

「オアフOahu島の一方には、今日でもやはり夜間にはラプ(Laapu)といふ幽靈が來る。彼等は太鼓を打ち、又其の呪文を唱へる聲も聞える。彼等の姿は霧か煙の如くにして、古いお寺(ヘイアウ heiau)の廢墟の上をさまようてゐる」

といふ。これらの布哇人に關する傳說はハワイの幽靈傳說(Hawaiian Legends of Ghosts and Ghost-gods)に據つたのであるが、其の著者ウエスタアヴエルト(Westervelt)氏は更に自己の見聞談を記して曰く「あるハワイ女は一幽靈が同氏の耳に何事か囁くのを見た。それは、氏が何か話してゐる時であつたとて、彼の女の語るらく、

『其の幽靈は火か又は色のついた光の樣であつた』

と。一般にハワイ人は、祖先の幽魂が神として實在するものと信じてゐる。」

即、上文引用の如く、彼等土人は、幽靈の姿を見て雲烟的とし、又多少火光の類とも關係ありとし、而て其の夜間に現るゝものなる事を信じてゐる。又他の布哇傳說に

は生者か幽靈かを試驗する爲に、ある樹の葉を打ち敷きて、其の上を歩ませる。幽靈ならば音もせず又、葉も破れないといふのである。是の如きは日本の所謂幽靈と殆、同一の樣子ではないか。

余は尙、此の外もつと物語的の例證を引きたいが、本章ではまだ〳〵他に論ずべき事があるから、それは別章に廻はして、こゝには、布哇人の考へる幽靈思想中には、一は日本古代の神話に類するものがあり、而て同時に中世以後の幽靈の性情も具有してゐる事、即、我が國の傳說上では、迹付け得ざる民族心理の一經路を見出すてふ事、而て又、これが强ち布哇土民のみに限れるには非ずして、一般に認め得る未開人の心理なる事を注意しておきたいのである。

四　我が國中世以後の幽靈

現今、我等の間に傳へらるゝ如き幽靈は、旣に藤原時代に現れてゐることは第一節

に述べた。然らば其の後の分化の有樣は如何。寬元元年乃至建長一二年の交（今より約六百七十年前）に書かれたりとせらるゝ平家物語の卷の第七、「青山の沙汰」には左の文がある。

「村上の聖代、應和の比ほひ、三五夜中新月の色白く冴え、涼風颯々たりし夜半に帝、淸涼殿にして玄象（仁明の御代、貞敏渡唐して傳へしといふ名ある琵琶）遊ばされける。時に影の如くなる者、御前に參して、優に氣尊き聲を以て、唱歌を目出度う仕る。帝、暫、御琵琶を聞かせ給ひて、抑、汝は如何なる者ぞ。何くより來れるぞと仰せければ、答へ申して曰く、是は昔、貞敏に三曲を傳へ候ひし大唐の琵琶の博士、廉姜夫と申す者にて候が、三曲の中に秘曲を一曲殘せる罪に依つて、魔道に沈淪仕る。今君の御撥音妙に聞え侍る間、參入仕る處也。願くは此の曲を君に授け參らせて、佛果菩提を生すべき由申して御前に立てられたりける青山（同じ由緒の名高き琵琶）を取り、轉手をねぢて、此の曲を君に授け奉る」

これで見ても、生前何等か執心の殘りし爲に未だ佛果を得ずして幻影の如く再び人界

に現れるといふ思想で、純粋の所謂幽霊である。けれども、かくの如きを觀察するのは、とにかく謡曲を調べるのが一番便利で又適當である。何となれば謡曲は人も知る如く、藤氏衰亡、源平對立乃至、戰亂不倫、南北兩朝の各時代を經て、室町幕府に至り始めて大發達をなし集大成せられし能樂の文章である。されば、此の中には上代、中古の諸傳說は、殆餘す所なく其の材料とせられてゐるのみならず、大體、謡曲文の構造がいはゞ千遍一律でいつも何か亡者や妖精や神靈の如き者を借り來るのを其の常套手段としてゐる。故に幽靈なぞも隨分度々出てくる。二百番中の六十二種には亡靈現れ、しかも一曲中に衣裝換へして二度も顏を出すさへ少くない。又、夫婦づれでも現れる。おまけに從前の傳說上には何等、亡靈として出でし事なき人間までも謡曲中には、幽靈の役割を仰せつけられてゐる。こんなわけで謡曲に於ける幽靈は、勢ひ各種の形式を有つて描かれるわけである。余は右の如き見地と理由とよりして多少精しく其の方面の觀察を試みた。左に之を語らうと思ふ。

（一）戰國時代の餘勢猶强く、堂々と名乘を擧げて現れる元氣な幽靈がある。即、「船辨慶」には、

「抑、是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽靈なり。あら珍しや、いかに義經、思ひもよらぬ浦波の「聲をしるべに出舟の、聲をしるべに出舟の、「知盛が沈みし其の有樣に「又義經をも海に沈めんと、夕波に浮める長刀取り直し、巴浪の紋、あたりを拂ひ、潮を蹴立て、惡風を吹きかけ、眼もくらみ、心も亂れて前後を忘ずるばかりなり」

といふ勢である。九郎判官義經は只事ならずとて、「いかに辨慶」と呼ばせ給へば、「御前に候」と答ふ。こゝに義經、

「今更驚くべからず、たとひ惡靈恨みをなすとも、そも何事のあるべきぞ。惡逆無道の其の積り、神明佛陀の冥感に背き、天命に沈みし平氏の一類、

と罵り給ふ其のうちにも「主上を始め奉り、一門の月卿雲霞の如く、波に浮みて見え

けるに、

「其の時、義經少しも騷がず、「其の時義經少しも騷がず、打物拔きもち現の人に向ふが如く、言葉を交し戰ひ給へば、辨慶おし隔て、打物業にて叶ふまじと、珠數さら〳〵と押しもんで、東方降三世、南方軍荼利夜叉、西方大威德、北方金剛夜叉明王、中央大聖不動明王の索にかけて、祈り祈られ、惡靈次第に遠ざかれば、辨慶舟子に力を合はせ、御船を漕ぎのけ、汀によすれば、猶、怨靈は慕ひ來るを、追つ拂ひ、祈りのけ、又引く汐にゆられ流れ、また引く汐にゆられ流れて、跡白波とぞなりにける。

(二) 又甚、風流で陽氣な幽靈がある。「源氏供養」に出てくるのがそれで、紫式部の亡靈は、請はるゝまゝに舞ひ出すのである。

まづ墨染の衣の袖を打ち拂ひ「是は安居院の法印にて候。我、石山の觀世音を信じ常に歩みを運び候。今日も又參らばやと思ひ候。」と出て來れば、紫式部は現れて、

「我れ石山に籠り、源氏六十帖を書き記し、亡き跡までの筆のすさみ、名の形身とはなりたれども、かの源氏に終に供養をせざりし科により、浮む事なくさむらへば、然るべくは、石山にて源氏の供養をのべ、我が跡弔ひてたび給へと、此の事、申さんとて、是まで參りて候」と話しかけながら、一時「色に出づるか紫の、雲も其方が夕日影、さしてそれとも名乘り得ず、かき消すやうに失せにけり、かき消すやうに失せにけり。」

さて法印は其の夜も石山に參籠して、念願を込め心を澄ましける程に「かくて夜も深更になり、魔の聲をさまり、心すごき折節、燈火の影を見れば、さも美しき女性、紫の薄衣のそばを取り、影の如くに見え給ふは夢か現か覺束かなかりけり。併し、法印もそれと悟りて、「石山寺の鐘の聲、夢をも誘ふ風の前、消えしはそれか燈火の、光源氏の跡とはん、光源氏の跡とはん」と語り出づれば、式部もいとど喜びて「あら有う難の御事や、何をか布施に參らせ候ふべき」と聞く。法印は、「いや布

施などとは思ひもよらず候。とても此の世は夢の内、昔に返へす舞の袖、只今舞うて見せ給へ」とて紫式部に舞を一さし所望する。こゝに式部は、

「恥かしながら、さりとては仰せをいかで背くべき。いで〳〵さらば舞はんとて、本より其の名も紫の「色珍らしき薄衣の「日も紅の扇を持ち、「恥しながら弱々と「あはれ胡蝶の一遊び、夢の内なる舞の袖、夢の内なる舞の袖、現に返へすよしもがな、

「花染衣の色襲「紫匂ふ袂かな。

右の文では夜現れし紫式部の幽靈が「影の如くに見え給ふ」とあるから幻影的のものと見るべきであるが、之に反して常人と少しも變らぬ幽靈もある。否、謠曲に出るのは大部分これで、六十二種中四十九種迄は一番最後に、例のかき消すやうに失せたり、我は何々の幽靈なりと名乘る迄は、對者が、感知し得ざる種類である。其の常人的幽靈の中でも一つ美人を出して見ると、

(三) 唐土玄宗皇帝に仕へる方士が、命を受けて、楊貴妃の靈魂を探し尋ねに來る。「餘

りに帝歎かせ給ひ、急ぎ魂魄の在所を尋ねて參れとの宣旨に任せ、上碧落、下黄泉まで尋ね申せども、更に魂魄の在所を知らず候。玆に未だ蓬萊宮に至らず候程に、此の度蓬萊宮にと急ぎ候」とて、やつてくると、王妃は内にまして、「何、唐帝の使とは、何しにこゝに來れるぞ」と

「九華の帳を押し除けて、玉の簾を撥げつゝ、立ち出で給ふ御姿雲の鬢づら、花の顏ばせ、寂寞たる御眼のうちに涙を浮めさせ給へば、梨花一枝、雨を帶びたる粧ひの、雨を帶びたる粧ひの、太液の芙蓉の紅、未央の柳の緑も、是れにはいかで優るべき。實にや六宮の粉黛の顏色なきも理や。顏色無きも理や。

(四) 同じく支那種ではあるが、趣向が中々複雜で多少妖怪がかつてゐるのは「昭君」の曲である。

「昔、桃葉といひし人、仙女と契淺からざりしに、仙女空しくなりて後、桃の花を鏡に映せば、即、仙女の姿見えけるとなり。この柳もさながら昭君の姿、いざさせ

給へ、鏡に映して影を見ん」とて、昭君の親が異郷の愛子の面影をあこがれてゐると、一方でも、

「是は胡國に遷されし王昭君の幽靈なり。さても父母、別れを悲しみ、春の柳の木の本に、泣き悲み給ふ痛はしさよ、急ぎ鏡に影を映し、父母に姿を見え申さん。春の夜の朧月夜は顯れて曇りながらも影見えん。」

といふてゐるのに、どうしたことが、頭に荆棘を戴き、髪ふり下げて、耳には鎖を下げたる鬼神の如き形相！

「恐ろしや鬼とやいはん、面影の、身の毛もよだつばかりなり。いかなる人にてさしませば、鏡には映り給ふらん。」「是は胡國の夷の大將、呼韓邪單于が幽靈なり。」「胡國の夷は人間なり。今見る姿は人ならず、目には見ねども音に聞く、冥途の鬼か恐しや。」「呼韓邪單于も空しくなる。同じく昭君が父母に對面の爲に來りたり。」

(五) 又、人をたぶらかすこと恰も狐の如き幽靈は「熊坂」である。

「是は都方より出でたる僧にて候。我いまだ東國を見ず候程に只今思ひ立ち東國修業と志し候」とて、一人の雲水が出て來ると、「なう〳〵あれなる御僧に申すべき事の候」と呼び掛けるのは同じく僧形の熊坂長範の亡靈である。「今日はさる者の命日にて候。弔ひて給はり候へ」「それこそ出家の望みなれ」などゝの應答ありて、

「さらばこなたへ御入り候へ。愚僧が庵室の候ふに。一夜を明して御通り候へ」「さらばかう參らうずるにて候。」

と雲水が中へ這入つてみると、なんだか合點の行かぬこと夥しい。「如何に申し候。持佛堂に參り勸めを始めうずると存じ候處に、安置し給ふべき繪像木像の形も無く、一壁には大長刀、柱杖に非る鐵の棒、其の外、兵具をひつしと立て置かれ候は、何と申したる御事にて候ぞ」と、不審かるのも無理はない。熊坂の幽靈は、すかさずまことしやかに、「似合はぬ僧の腕立てさこそおかしと思すらん。さりながら佛も彌陀の利劍や愛染は、方便の弓に矢を矧げ、多聞は鉾を横へて、惡魔を降伏し、災難

を拂ひ給へり」などゝ、出鱈目の物語りにお茶を濁してはや夜もふけければ、

「お休みあれや御僧達、我もまどろまん、さらば、と眠藏に入るよと見えつるが、形も失せて庵室も草むらとなりて、松蔭に夜を明したる不思議さよ。夜を明したる不思議さよ。」

後世の幽靈にも、右に掲げたやうな種類は餘り見受けぬやうである。兎に角人を馬鹿にしてゐる。

(六) 余はも一つ「隅田川」から例を取らう。それは都の童子、梅若丸が人買の手に浚はれて、奥州に伴はるゝ途次、江戸の隅田川邊に病死した。梅若の母は、子を失うてから狂氣して遙々行方をたづね來りし所、其の臨終の地で、南無阿彌陀佛の聲のうちに、子供の亡靈が現れるといふ筋。

「なう〳〵今の念佛の内に、正しく我が子の聲の聞え候。此の塚の内にて有りげに候よ。「我等も左樣に聞きて候。所詮、此方の念佛をば止め候べし。母御、一人御申

し候へ。「今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。(すると子供の聲で)「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と「聲の内より幻に見えければ、「あれは我が子か「母にてましますかと、「互に手に手を取りはかせば、又消え〳〵となりゆけば、いよ〳〵思ひはます鏡、面影も幻も、見えつ、隱れつする程に、東雲の空もほの〴〵と明け行けば、跡絶えて、我が子と見しは塚の上の、草茫々として只しるしばかりの淺茅が原となるこそあはれなりけれ、なるこそあはれなりけれ。」

余の引例も一先づ此の邊で切り上げやうと思ふが、此の際、謠曲中の幽靈として氣の付いた事を結論しておかう。第一に、其の種類が甚、種々雜多で、云はば幽靈は今や十分の發達を遂げてしまつて、寧ろ、其れ以後、即、德川時代に於ける種類等には却つて偏つた型式が多い樣に見える。德川時代に就いては、余は次篇に述べるが、前述の諸例にも見る如く、室町幕府時代の謠曲に於いては、或は全く常人と區別のつかぬ幽靈もあり、或は幽靈自身が初めから「我こそは何々の幽靈なり」と名乘るのもあり、

或は幻の如く、影の如くに、隱見するのもあり、又は美人の幽靈、武者の怨靈、乃至後世の狐狸の類のすなる、たゝりかしの如き趣向もあつて、これは後の雨月物語の「淺茅が宿」と多少似寄つた局部もあるが、大體に於いて、どうしても大に趣が違ふ。尤も謠曲は其の構想上、引き合ひに出される幽靈も極めて人間的なのが便利とした故か、數の上に於いては常人と見分けのつかぬ姿のものが、前述の如く、六十二の中四十九も存することは當に注意すべく、又も一つ、特徴とすべきは、後文の幽靈に殊に其の繪畫の上には、せひ附き物となつてゐる「陰火」即「人玉」の事が殆ど一も書かれてない事である。かの「誓願寺」の中に、

「和泉式部は我ぞとて、石塔の石の火の、光と共に失せにけり。光と共に失せにけり」といふのがあるけれども、これも後世に所謂人魂の火なるものとは趣きが異つてゐる。

尤も、余が上文に掲げし如き定義に拘らぬ時、即、ただ怪火てふものゝ思想は素よ

り他の未開人に於けると同樣に已に神代からあるので、日本書紀には大已貴神が海上に神光の浮來するものを見て、これと問答した話がある。(後文の靈魂論參照) 又太平記の第十一卷「越中の守護自害の事、附り怨靈の事」の中には、海上にて三人の男の幽靈、三人の女の幽靈と相ひ逢はんとして、「猛火俄かに燃え出でゝ、炎、男女の中を隔てける」事を書き、同じく卷第二十三、大森彦七が事の條に正成の怨靈が、或る時は遙かなる海上に、裝束の唐笠程なる光り物二三百としてまづ現れ、然る後、凄じき不思議をなすことを載せてある。これらの思想からして追々と、個人的の幽靈の周邊に青白い火の玉が飛びまはるやうな、後世德川時代の陰火思想が發生して來たものと考へられる。而てこれは何故かといふに、畫工が追々此の種のものを畫くつれて、其の工夫上、或は火を飛ばせ、或は下半身を朦朧とせしめて、其の凄味と幻影的の感じとを強く出さんと努めたからであらう。余は更に此所に至つて、世俗行はれてゐる口碑につきて一言せねばならぬ。よく人は、日本の幽靈の脚の無いのは新らしい事で、か

の圓山應擧が自分の妹の肺癆を病みて、痩せ衰へたる振り下げ髮の姿の月夜にさつと障子に映りしをば、目にとめて鬼氣人を襲ふ底の幽靈畫を描き出でた。それが、脚の無い幽靈の始めだと云ひ傳へてゐるが、これはどうも、一を知つて二を考へざる話である。成る程、余も前刻述べし通り、畫工の趣向が、右の觀念助長には甚有力なるものであるけれども、さりとて、それ以前の人が、幽靈にも二本の脚が有ると考へてゐたのに應擧なり、他の畫家なりが、無脚の人物を描きし爲、人の思想も變換したのではない。否、現に源氏物語なる御息所の生靈が、影の如く髣髴と現れしを始め上記の謠曲文中にも隨分、幻影的の姿を記載してゐるでないか。この幻影を畫筆にするから腰以下をぼかしてしまうたのである。俗傳を信じてこゝを取り違へない樣に望む。又其の證據に西洋の幽靈も、かの有名なるハムレットの姿はやはり幻や影の如くに書き表はされ、又余の所持する西洋の幽靈的怪物の圖にも明かに、日本人と同じやうな姿が描かれてある。

次に、も一つ注意すべきは男女のことであるが、謠曲中には男性の幽靈が三十六、女性のが二十九であつて、其の性の上では、余は今迄の範圍内ではさして重要な關係を認めない。尙、其の他にまだ〳〵精細に論究したいものがあるけれども、然かすれば一部の讀者には滿足でも却つて一般には興味の索然たることを覺えるから、余は、こゝに更に筆頭を轉じて、事實と思はるべき幽靈や、其の解釋を次章に載せやうと思ふ。そこで本篇のみの結論として左の如く約言しておく。

五　以上の結論と卑見

1　神代には後世の所謂、幽靈は出て居らぬ。

2　藤原時代には既に成熟した幽靈がある。

3　以上二項の中間に位する、幽靈發達の過渡期を示すものは、我が國の傳說中に見當らぬ。

4　併し、他の未開人に於いては、其の例證に乏しからずして、殊にハワイ土人の幽靈は、余が引用した通りである。

5　謠曲には各種の幽靈が出る。隨つて後代の大低の種類はこゝに含まれてゐる。たゞ一つ後世に畫く如き、個人的幽靈に伴隨する陰火即、人魂（ひとだま）の事がまだ見當らない

6　今迄のでは男女の性に大關係なし。又俗間には幽靈には、脚なしといふことを應擧以來の思想と傳へられるが、其の然らざることは本文に論述の如し。

ものの　け　　參　和

もののけは葵の上のわざならん

加茂の車のあらそひの後

第二章　幽　靈　の　實　在

一　事實と見做し得る幽靈

吾々の微妙なる精神活動は、五官以外の媒介又は作用に由りて、相互に感應、交通し得るものと、余は信じてゐる。現代、尙、未解決の此の問題に向つて、何故余は斯かる信念を有するに至りしやは、請ふ、次項に之を叙べやう。兎に角、此の見地に立つて世上幾多の幽靈譚を耳にする時、實に、之を荒唐の妄想、無稽の怪談としてのみ一笑し去るに忍びない多くの實例に遭遇する。其れに就いての解釋も亦同じく次項に併せ說く事として、まづ左に若干例を引用しやう。余は固より、人間心理が或る情況下に於いては、自ら知らずして欺かれ了ることも知つてゐる。又眞實を傳へんとする其の供述に、故意ならぬ嘘僞の混ずることも知つてゐる。けれども、かゝる夾雜物、

不純分子はいくらあつても構はぬ。これを純粋なるものに成し、而てこゝに眞理の光を輝き出させることも我等の天分だと感じてゐる。以下擧げる幾例は、余が信じて最も不純物の尠く述べられ、又、欺かれずして聽取し、又は書き取れたものとなす所である。讀者にして、亦、斯る實驗等有らば、余に通報の勞を取ることを吝み給ふ勿れ。

〔第一例〕 子供の幽靈

時は大正三年の六月七日、午前二時頃。處は東京府田端のF氏の家。當夜は駒込の知人が此の家に宿泊したりしが、半夜、ふと眼を醒ませたるに、幼き一少女、室の中央に立つてゐる。オヤ、此の夜中にこんな子供がと不思議に思うて改めて見直してもやはり其處に居る。聊か氣味わるくなりて、其のまゝ蒲團かぶりて、曉方まで寢ねた。

而て驚いた事には、其の早朝、近隣の一畫工、田村方より昨夜二時頃、女兒死亡の旨を通知してきた。田村氏には一昨年八月生れの小女ありて、平素は此の家(F)

に來りて遊び戯れるのを常とした。然るに今度、急性の病氣の爲に死んだのである。此の話は同地の近隣にて相互親交ある、余の從姉、兼子とよ女が其の當時、親しく聞きて余に傳へたのである。

〔第二例〕 死出の暇を乞ふ幽靈

九州熊本の生花の師匠、太田松蔭齋理豐氏の談。今よりは、はや十年以上と思ふ。其の母、或る夏の夕、家の裏口で行水を使ひゐたるに、ふと眼前に從姉妹の姿現れた。彼の女は當時、十里も隔てし處にありて、頻死の重病であれば、まあどうして、此の遠路を、しかも單身來られしやと尋ぬるに、彼の女はたゞ潸々(さめざめ)と泣くのみ。やがて屋敷の中へ行つた。此の家の老母も、早速、湯あみ了へて座敷に入り、今來し客人は何處ぞと聞いても、他の何人も知らない。此の不思議ありし時刻は正に、本人近去の刹那であつたとは、間もなく知り得たのである。

世の所謂幽靈の最も定型的なのは、此の種類で、其の傳へらるゝ所、古來、口碑に著述

に、實に枚擧の暇も無い。余はたゞ、自己自身の親しく聞きし所をのみまづ、順序として例示した。而て世人の幽靈を云ふもの、皆、「死者の靈魂が、中有に迷ふ間に、故舊の前に現れる」とやうに云ひ傳へて、此の思想が、甚、先入主となつてゐる。けれども、讀者よ、一寸考へて見たらすぐ樣、次の樣な疑問が起らないであらうか？ 即、多くの例に於いて幽靈の出現と、其の當人死去の時刻と相一致する場合が多い。然らば、今、現れ出づる幽靈は果して生前の靈魂なりや、はた死後の夫れなりや。人若し肉體にこそ死生の別あれ、靈魂には變化なしと辯じた處で、然らば、其の靈魂は尙肉身生存中に先づ脫去して、他人の眼に影向せりや、はた肉身滅後に屬せりやは依然疑問である。又人は辯解して、否、其の孰れにも屬せず、正に死生の境に在りと云はゞ云へ。併し乍ら讀者よ、世の幽靈譚には、隨分、其の人の死後に幾度も幾度も出現する例もあり、又、所謂生靈として、其の當人存命中に奇怪を現ずること、また古くは源氏物語の葵の上の話、乃至は余が靈魂論中に引きし續砂石集の物語など、共に其の

著しき例である。然らば種類を分ちて、生前のを生靈とし、死後のを死靈とし、而て生死の境にあるを本題の如く幽靈なりと命名せんか。かう云ふ約束は甚好都合のやうであるが、世上、云ふ處の幽靈の意義は既に古來、死後の場合も皆含ませてゐるやうで、今更、異を建てゝも却つて混雜を致くに過ぎない。のみならず、幽靈は生死の中間境に現るとした所で、實は一分一秒も違はず、同時刻に他に出現したのか、どうかも疑問であるし、若し又、其の出現が必しも絶息時と同時でなくともよいといふならば愈々以て、其の所屬が分らなくなる。而て、其の果して孰れなるにせよ、元來が人間精神の妙用といふ根本的思想が、三者に共通なる要因である以上は、寧ろ、無理な混雜し易き區別を廢して、生存者が他處の他人に幻影的出現をなす時も、乃至其の他の幽靈も一切、含めて之を幽靈としたならば、之を取扱ふ上にも甚統一的で理論上無理がない。されば余は上文にも、此の意味を以て、幽靈を定義したのである。こゝに尙一言注意せねばならぬのは、生靈てふ意味である。從來、此の語を以て、必しも、

其の人物の姿態が現れずとも、冥々裡に妄執的心理作用が及んで、或は懊惱し或は狂亂する等の場合にも用ゐる。猶此の事は、幽靈又は死靈てふ名に於いても同樣で、往々、姿も見えず、聲も聞えずとも呪詛的妄念の所爲として、同一語を用ゐられる。而て右の如き用例と同時に、目にあり〳〵と姿を見、耳に其の聲を聞く如き場合も矢張り、幽靈といひ生靈等といふ。此の邊の用語法は甚漠然として、明確な觀念が無かつたやうである。これではまた、立論、分類の上にも甚不便であるから、相當の見解を定めて置く必要がある。

そこで余は其の影向する人間の生死如何に拘らず、とにかく視覺的乃至他の感覺的に顯現するものを幽靈とし、而て、單に靈的影響として對象者が惱まさるゝ如き場合には、其の生死に應じて生靈又は死靈と呼ぶことゝし、而て夢に現るゝ所の幽靈的現象は、其の所地に應じて「夢」なる部門中の一項、例へば「夢と精神との關係」等として、論ずることゝする。余は上述の如き見地より、幽靈を論じてゐる。隨つて當然

の順序として、左の一編をも語り忘れてはならぬ。

〔第三例〕 早曉訪れ來る青年の姿

大正四年の正月七日早曉、六時頃である。ひろ子は當時英學塾の豫科生で、其の姉みす子は女子大學英文科の二年生であつた。みす子は平素中々の決斷力ある、しつかりした性格で、幼時からねぼけるやうな事も決してなく、ひろ子も、理化學的の事に興味をもつて、嘗つて迷信めいた考へを有つてゐなかつた。此の二人の姉妹は、隣り合つた部屋で、中間を半ば開け放した襖に依つて境ひしつゝ寢て居つた。ひろ子は一時、目を覺ましたが、まだ邊りが暗いから、再びうと〳〵としかけた。

——其の時、不意にガタ〳〵ガタ〳〵と姉の寢室の緣側に出る障子の邊に音が聞える。無理にこゝを開けやうとする音である。眞直に引手を持てば素直に開くのを、焦れ切つて、却つて目的を達し得ぬ時の音である。オヤッと思つて首を擡げたが、次の瞬間、姉が今、厠から戻つて來たのだらうと思ひ直して、其の想像を確むべく、

彼の女の寢所を覗いて見た。所が彼の女は靜かに少しも動いた景色なく横はつてゐる。ひろ子は此の辻褄の合はぬ事柄に、一時にゾーッと感じた。もう默つて居れなくなつて「誰？」と聲をかけた。姉も鸚鵡返へしに「誰ッ！」と叫んで、こちらを見た。そして「今障子をガタ〳〵いはせたのはあなたぢやなかつて？」と確めてから後、彼の女は語る。

「今、障子を開けやうとした音が聞えたでせう？　ヤッとスーッと開いたから、あなたが自分の床へ歸つて行くんだなと思つてゐると、それと同時に急に私の夜具の袖が重くなつたから、あなたが惡戯をして乘つたんだと思つて「いやあよ」と云はうとして振り向いたら——」

斯う云つて、彼の女は今の氣味わるさを再び想ひ出す如くに口を噤んだ。つまり戸が開くと共に、姉みす子の眼に映じたのは黑い學生服を着て、片手に帽子を持ち、片手に手袋を提げ、悄然と立つてゐる、若い嘗て見覺えのない青年の姿であつた。

それはほんの一瞬、振り向いたみす子を見下すと忽、影の樣に再、緣側の方へ踵をかへした。其の時障子を閉めて出て行つたかどうかは、餘り不意な事件に肝をつぶした、みす子の記憶には殘らない事であつた。然し後で調べて見たら、前と少しも違はず、キチンと閉されてあつた。

此の怪しき事件の後で、家人一同はいろ〳〵取沙汰した。みす子は、初めこそ誰とも考へ付かなかつたが、どうやらYさんの樣な氣がすると云ひ出した。Y氏は當時工學士として北越のN市の某會社に勤務してゐたが、實は彼れにとつて、みす子は唯一の愛人であつた。まだ大學生の頃から意中の人として、既にみす子の母もさう許してゐた。併し肝心の姉の心に愛がなかつたから、とう〳〵彼は失戀の人として雪深き都へ去つて行つた。此の頃は、姉は少しも彼の事を思はなかつたといふ。此の年の春も過ぎて、青葉色濃き五月の、日もあの時と同じ七日の朝、彼はあへなく自殺して果てた。尤も最近の原因は、其の勤める會社の事業上に關して、失敗の

事があつたからだと噂されてゐる。失戀と失意とを兼ねし隣れなる此の青年が萬斛の怨涙は凝つて其の生靈を百哩離れた彼の女の枕頭に立たしめたのではなからうか？

西洋にも殆、全く日本のと變りのない幽靈談がある。左に比較の爲、二つばかり引いてみやう。

〔第四例〕 親友の幻影

S氏とFL氏とはかねて八年來の極めて仲善き親友であつた。一千八百八十三年三月十九日、月曜の事であるが、FL氏は役所へ出勤の途中、腹痛が起つた。そして土曜日には、彼は缺勤した、あとでS氏が知つた所に據れば、此の日は醫者の診察を受けたので、一兩日は缺勤した方がいゝと勸められた。けれども、特別に危險な症狀だと言はれなかつた。

此の土曜日の晩、即、三月二十四日にS氏は頭痛を覺えて在宅し、瓦斯燭臺を照

らせる一室の薄暗い方に腰をおろし、妻は、室内の眞中で書見してゐた。

「メッキリ暖くなつたね。けふは暖か過ぎる」と彼は妻に言つた。そしてズッと身體を長椅子にもたせ掛けて、ふと、前方を見ると！ そこに、親友のFLが平常通りの衣服をきて立つてゐる。併し其の帽子には喪章が着いてあり、上衣のボタンは外づれて、手にはステッキを持つて居つた。FLはジイッと彼を眺めてゐたが、やがて立ち去つた。其の瞬間、S氏は總身にゾーッと感じて、身の毛のよだつを覺へた。

彼は妻に向つて「今は何時だい」と尋ねた。妻は此の時、他の方向を見てゐた。

「九時に十二分前ですよ」と妻は答へた。彼は其の友人の死を確信して妻に語り、妻は、たゞ一時性の妄想でせうと論じた。併し果して夫の言ふ通りであつた。

翌くる日曜の午後三時頃、FLの弟はS氏を訪問して、述べし所に據れば、其の臨終は正に幻影のものゝ出現した時日に一致してゐた。(Barrett: Psychical Research)

〔第五例〕 婚禮の夜生靈となる

陸軍大佐、メドウス、テイラーMeadows Taylor氏は其の自叙傳の第二卷第三十二頁に曰く「私をして一生結婚すまいと決心せしめたのは全く此の不思議にぶつつかつたからである。これは丁度、ハイデラバットHyderabad へ向つて行軍中の事で、とても忘れやうとて忘れられぬ。今、日時もよく分つてゐるが憚る所があるから差し控へる。それは私は若い時から深く馴染み合つた一人の女があつて、當時も英蘭(イングランド)に居つた。私は賜暇を得て、一度歸國し、此の娘を手にせんものと希望してゐたのであつた。が大落膽にも、遂に休暇が許されなかつた。

或る夜の事である。今日は午後から、ムックツルMuktul を出發して、可成り長途の行軍後、デワス、クデアDewas Kuden に到着して、こゝに一宿する事となつた。私は隨分疲勞してゐた。村の犬は頻りに吹え立てる。野良犬の遠吠も聞える。時候は中々むし暑い。かうした情態で、中々睡り難くて、大きな目を開いてゐた。

突然、天幕の入口にかねて忘れた事のない人の姿が現れた。併し多少ふけて見え、且甚しく打ちしほれてゐる。衣服は白色で、多くのレイスを飾り付け、月の光で光つてゐた。彼の女は兩腕を延ばして、さも悲しげに叫んだ。

「あなた、私は行くのがいやですよ、行くのがいやですよ」

私は驚いて飛び上つた。併し姿は追々薄れ行きて、はや見えぬ。たゞ聲はまだ聞えてゐる。私は天幕の外まで馳け出して、哨兵を驚かした。勿論、外には何物もない。私は早速、父へ手紙を出して聞き合すと、其の返事に「既に遲い。彼の女はもはや嫁入した。しかもお前が其の姿を見たといふ日に」とあつた。

此の大佐は後年、他の女と結婚したのは事實で、現に、右の著書を編纂したのは、彼の娘である。而て彼の女は父が屢此の話を繰返へし、又實にかのPhantasms の第二卷第五百三十八頁に書いてある通りの幽靈であると物語つてゐたさうである。

余は第一例に、滿一歳十ヶ月の幼兒が幽靈として、平素遊び馴れし家に現れしこと

を述べたが左の例も正に注意するを要する。

〔第六例〕 幼女、從兄の水難を知る

一千八百六十七年正月二日の午後であつた。此の話の報告者E.M. Ogdenの娘、Augustaといふ三歳になる子が、人形を以て叔母さんの側で遊んでゐた。當時、叔母さんは紐育なる當家に滯在してゐたのである。又、從兄弟といふのは、二人あつて、十一歳の子はデイリアスといひ、他は九歳でデヴイウド、アダムといふ。此の時本市より二十五哩隔たりしペン、ヤンに居つて、オーガスタとは昨初秋以來まだ會はない。そして、此の頃は一切其の消息を聞かされし事なく、又、何處に居るかさへ知らなかつた。唯、彼の女とデイヴイッドとは甚仲善しであつた事は事實である。

偖、此の日も、お人形で無心に遊んでゐる時、突然叫んだ。「おばちやん。デヴイちやんが水に落つこちて死んだよ」と。

之を聞いて父は「ガスや。何を云つてるのだい?」と問ひ返へすと、又「デヴイち

やんが水に落つこちて死んだよ」と言ふ。

叔母さんは、彼の言葉を聞き馴れないから、「ガスやお前の云ふ事は分らないね」といつた。すると子供は、又もや「おばちやん、デヴイちやんが水に落つこちて死んだのよ。」彼の父は時計を見ると丁度四時であつた。——此の夕方、兄弟の許から「愚息、デイリアスとデイヴイは今日四時、ケンクス湖上で氷滑中溺死す」との電報が來た。實にあの時、子供の發言は殆、靈感的といふべく、其の父自身も、果して彼が『水に落つこちて死ぬ』といふ事はどんな意味であるかを知つてゐるか否かが既に疑問であるといつてゐる。(Barrett; Psychical Research)

こゝに余は之を引用するに當つて、此の話を事實とした所で、果して如何なる現象であつたのであらうかを速斷しないやうにせねばならぬ。子供が人形を持つて遊んでゐた時で、しかも親達と問答したのであるから、睡眠してゐたのでないのは事實である。隨つて普通の夢ではないであらう。然らば白日夢の種類で、上記の凶變を幻視したの

であらうか？此の子供が自ら左樣に見えたと云はないから、何とも決しやうがない。けれども、推察するに或は眼前に其の姿が現れたのであらうと思はれる。かう解釋するのは、最も有り得べき事であらう。故に余は本例を此處に引いたのである。

〔第七例〕　亡靈、竹馬の友と會談す

群馬縣福地載五郎氏の報に曰く、予が產地は上州前橋なるが、同地の緣家に予と同齡の男子某あり、予は父の四十二歲の時生れしより假りに棄兒とせられ、（俗に四十二の二つ兒と稱して四十二歲の人の子は禍ありといふによる）某の父を拾ひ親と定めし事あり、加ふるに予が母乳に乏しかりし爲め、某の母に乳養せられ、十二三歲の頃迄は常に相往來し、予と某とは恰も眞の兄弟の如くに交れり、然るに予十三歲の時入京し、某と相見ざること數年の後、一度歸鄕せしことありしも、當時某は或縣立學校に入學してありたれば、終に面會するを得ず、交情漸く疎にして、今は他人と異なること無き程迄になりたれば、某を思ふこと曾てなかりしが、明治十六年

の暑中に一日の閑を得て郊外を散步せしに、途中にて圖らずも某に邂逅し、種々笑談の後、某の著しく衰弱せるを異み、其の所由を問ひしに、某は過般來脚氣症の氣味ありしが、夏期に至り病勢增進して一時は步行すること能はざる迄に至りし故、湯治を兼ねて某所へ轉地せり、其の後漸く輕快に向ひ、一昨夜歸宅せし位なれば、病餘の疾憊猶ほ全く癒えざるなりと語りしに依りて、始めて其の病氣にてありしを知り、猶ほ大切にすべしといひて別れ、午後家に歸りしに、其の家より信書至る、輙ち開きて見れば書中某永々病氣の處、療養終に其の効なく、昨夜死去云云の語あり。此訃音にして信ならば、今朝途中にて某に逢ふべき筈なければ、且つ驚き且つ怪み、一時呆然としてありしが、兎に角打棄おくべきことにあらねば、直ちに某の家に至り尋ねしに、久しく病床にありて一時轉地せしことなどは、予が某に逢ひし時聞きし所と毫も差はず、而して其の死せしは實に昨夜の事なりし由を聞き、さては今朝逢ひしは某の幽魂なりしかと思はず膚に粟を生じたり。因て思ふに予と某と

の交情今日迄幼稚の時の如く親密なりしならんには、此くの如きことなきにも限らざるべしと雖も、當時は久しく相見しこともなく、殆ど絶交の有樣にて、曾て腦中に浮びしことすらなきに、而かもかく亡靈に逢ひしは如何なる故にやと、疑團凝りて解けず、且らく記して後日の研究を待つ。(井上博士、妖怪學講義より取る)

新聞紙上に喧傳せられし有名なる幽靈の中で、比較的最近のものは工學士松田氏舊住宅の幻影に就いてである。左に報知新聞の記事を引用しやう。尤も此の種の記事の有りうちとして、必しも始終、正確の報道とは斷定できないが、兎に角、本文の如き現象ありしことは、多少根據のある事實と信じ得られる。

〔第八例〕幽靈屋敷

明治四十二年九月二十二日の眞夜中過ぎ、本郷區千駄木町百七十番地の自宅に於いて、東京帝大工科大學助教授工學士松田勉三氏が拳銃自殺を遂げたる顚末は、當時の、紙上に掲載したるが勉三氏の母たけ子には同年十二月中、同區元町一丁目五十

八番地へ移轉し、本年二月に至り、倉持政憲といふ人は、母芳子、女中お作の三人と共に谷中方面より、松田氏の住まひし千駄木町に移轉し來り、法科大學生鴉澤憲氏と同居し、二階六疊の部屋にて勉強に餘念なかりしに、去る六月頃は、學士試驗切迫し、徹夜にて「ノートブック」に眼をさらせしに、陰晴常なき空の雨となつて階前の櫻に降り注ぎ、夜も更けて十二時過ぎになりしに、憲は睡魔しきりに催し、机に凭りたるまゝ、ウト〳〵と微睡み、不圖目をさませしに、洋燈の影小暗き所に骨秀で肉痩せ、形容枯悴せる美髯を蓄へし一人の紳士、悄然として端坐し居るに、憲は一種の凄氣に襲はれ、水を浴びたる如き心地し、再び紳士を凝視せしに彼は忽焉として煙の如く消え去りたり、憲は夢を見しに非るかと其のまゝに打ち過しに、一ヶ月を經て又たも此の怪異を繰り返へしたるより、愈々不審を懷き、倉持一家に語り、六疊の間を改め見たるに、南面せる障子及び鴨居には、血潮の痕點々として殘り、取り代へられたる新しき疊は濕氣を帶びゐるにぞ、附近にて問ひ合はせしに

松田工學士が拳銃を咽喉に當て、一發の銃聲と共に悲慘なる最後を遂げたる一室なりと知られたり。

以上列擧せし諸例は、まづ信用するに足る供述を根據としたので、尤も中には最後の二例の如き不十分な引例もあるが、併し乍らまた之を全然抹殺し去る事も忍びがたく思はれて共に收錄した。

二　幽靈現象の心理學的解釋

上記の諸現象が文野東西の諸人種間に絶えず存して、且、多少なりとも其處に「ハテ、矢張不思議な事もある」との思想の起る時、人々は之を何と見る？「だから理外の理」があると信用し切るのは無論愚夫愚婦の迷信である。「そんな事は、うそかほんとか分るものでない」と嘯くのは研究心のない淺薄な人間の事である。分らぬからこそ研究するのである。併しまた故井上博士の如く、それは妄想だ、それは妄覺だ。妄

想妄覺は病的の精神や、疲勞した心理に起る現象だ。故に幽靈なんかは存在しないといふ類の說明法は、其の論理に甚しき獨斷の存することを見逃してはならぬ。

余は謂ふ。それがたとひ妄想であつても、妄覺であつても構はぬ。否、かゝる心理現象はいつも必ず其の當人自身の精神變調よりのみ原因するとは限らぬ。之を、一時的にしろ、惹起せしむべき他の諸條件の存することも事實である。此處に想ひ及ばぬ間は、其の學說は淺薄であり、隨つて其の論結は獨斷となる。余は左の如き例を以て此の間の消息を說きたい。

夢に於ける實驗であるが、H●M子(三十四歲)は大正七年の正月、鄕里仙臺へ婚禮の席に列すべく歸つた。其の目出度き夜に其の家が火災に罹つたのである。其の心裡に受けし印象は非常であつたと見える。爾後約半ケ年間は、實に頻回、時には連夜、火災又は火焰の夢のみを見た。此れが一實例である。次に頭痛に惱む者は、ともすると赤や靑の色彩乃至火光の夢を見る。此の事はエリスも既に述べ、余も亦實驗した。第

三には婦人にして、其の月經に異常があるか、又は姙娠中などは、覺醒時には眼華閃發や彩視の現象あり、睡眠時には金色乃至火焔の夢を見ること稀でない。それからまたベルグソンも一實例を擧げてゐる如く、一睡眠者の枕頭を提燈を持つて通過したるに、彼は一火災の勃發したる夢を見た。右の如き場合の多くの例證は、余は拙著夢學や其の他に、一々典據を確かにして揭げてある。第五には精神病者が晝間にも夜間にも色々の火光的現象を幻視することあるのも事實である。されば、以上五種の孰れにも實際に火災等の事なくして、たゞ視覺的に然りと感ずるのであるから、皆、同じく火焔の妄覺である。併し乍ら讀者は各個に夫れ〴〵其の原因の存するを知られたであらう。即、病者も之を見るが、又心理的の印象、生理的の身體變調、乃至物理的の光線反應としても現れる。是の如くんば、單に精神病學で得たる幻視錯覺の智識のみで、其の他一切の類似現象を、一からげにして、病的の現象だと結論する如き事あらば、それはまた輕卒至極な妄論である。

幽靈現象に對しても此の心得を失つてはならぬ。成る程、何物も來るべき筈のない所へ、不思議の影の現れるのは、單にその現象のみを熟語的に命名すれば、妄覺でもあらう。はた妄想であるかも知れぬ。併し、此の妄想妄覺を誘發する本元の刺戟者は何物なりや、はた何處にありや。心疾者自己所造の諸妄像は、皆是れ固有の狂心理に由るであらうが、それと同時に他の幾多の情態下に、同一現象を誘導することを忘却してはならぬ。而て、人間が外物に反應する時は、必ず之を人間的に感覺し、人間の耳目が其の刺戟を蒙むるや、其の神經乃至中樞は必ず之を耳目的に感覺する。されば、目に受けし刺戟は幻影と現れ、耳が反應しては音聲と聞ゆる。而て、時によりては二又は二以上の官能が同時に共鳴することもあらう。幽靈を見、乃至これと語るの類また有り得べしと考へ得る。

さて、然らば、他人の横死や其の怨靈を此の身に感ずとは、そも〴〵如何にして能ふべきや。これが根本の問題である。併し、こゝに「人間の精神は相互に感應共鳴す」

といふ原理だに認められたら、それでいゝわけである。こんな事があるか？　學界の難問である。之を否定するものも、是の如き假說は何故不合理なりやを打破すべき確證を有しない。又、之を肯定する者も、公平に之を實證し得ざる限りは論據薄弱で、轉空論と誹られても返辭が無い。お互に根柢を有せざる間は、結局、感情的の水掛論に終るより外はない。人の心の問題は、是く六づかしいのも當り前である。

余は、余自身の實驗に據りて人心相互感通の可能なることを信ずる。左に余の著しき實例三つを擧げやう。

〔參考例第一〕

余の夢に東天を眺むるにまづ一條の光線、上下にスーッと現る。やがて波狀にユラ〳〵と振顫し、次に横方向にも光線が現れて同じく波の如くに顫動す。これは明治四十四年の八月二十六日、早曉の事である。偖、余も起床して、朝食を喫すべく坐した。其の時母が自ら語り出でゝ曰く、前刻、勝手元で朝餉の支度してゐた時、不

思議な事にも、暫くの間は、自分の眼前にチラ〳〵チラ〳〵と光線が見え、それが或は縱に上下し、又左右にゆらめいたと。余は何時であつたかときくと、母は、丁度余の起床する少し前であると答へた。即、余の右の夢と同時刻に當る。右の如き事件の一致は、或は一方の心象が他に感應したものかと想はれる。尤も余には、余の夢が母に感應したのか、母の眼華閃發が余に傳はつて、右の夢をなしたのか分らぬ。熟れにしろ注意すべき現象だと思ふ。

〔參考例第二〕

余が金澤の高岡町に下宿してゐた時である。時は大正二年二月一日の午後九時四十分。いと爽快なる心地で、冷水摩擦後の身體を、やれ〳〵と蒲團の上に横へた。はや、ねむけ催してうと〳〵とした時、パッと左の天空にまん圓い火の玉が現れた。半ば睡りかけた余は、オヤ月が見えると思うた。併し次の瞬間に、否これは屋根の下である。雨戸が閉まつてある。月が出てゐても圓く見える筈がないと、追々明瞭に

意識し出した。けれども、今の光團も確かに見えたのであるから、どうも不思議だとなた疑ひ始めた。そして早速飛び起きて其の方面の雨戸を開いた。果せるかな。間に一庭園を隔て半丁許り離れた、眞向ふの二階座敷の縁側へ、今しも二人の人が、一提燈を持つて出で、何か損處を修理中なるが如く、頻りと、其の火を、此方へ差し翳してゐた時であつた。即、余の認めたる火光の團塊は或は之を感覺したものらしい。

〔參考例第三〕

明治四十三年の夏、八月、余は同窓の親友、藤井正雄君(目下大阪にて醫を開業)と伊勢の阿漕が浦に海水浴をした。海に浸る時の外は、お互につれ〴〵であるから、試みに心靈交感の實否を兩人で研究して見やうでないかと云つて、まづ余は目を閉ぶつた。所が明かに「人」の字が一度現れては消え、再び現れてすぐ消えた。故に余は其の通りに答へた。藤井君は感心して然りと云つた。實は彼は左手に紙切り小

刀を持ち右手に鉛筆を持ち、さて心に「人」の字を念じつゝ、二度、其の刀及の上に「人」字を書いたのである。即、正に試驗的に、陽性の結果を得て愉快であつた。其の後も度々試みたが、まづこれが一番鮮かな成績で、代表的の例として擧げ得る。

右の諸例中、第三例は故意に實驗しやうと思念して、成功したることを示し、第二例は、無生物の火煙、乃至何等余と關係なき人々との間の事を感知した場合であり、第一例は、母子の孰れか一方の心象が他に映じ得べきを示す例となる。換言すれば其の精神機轉がたゞ共感の可能性なるが爲に、好都合の情態下では自發的にも受動的にも、心識感應の事あるを考へ得る。是に由て之を觀れば、一人の想念、熾烈にして、深夜沈々たる交、某々を意中に呼んで極度に之に凝思したりとせん。對者には或は生靈たるべく、其の幻影を現し出すであらう。又何等恩怨なき人々も、一定の情況下に於いては之を感ずること猶、無線電信の電波が、其の通信可能範圍内の凡べての受話器に感せらるべきと同じてあらう。

今春、學士院賞千圓を以て旌表せられし、帝大病理の山極、市川兩博士は、其の學說「刺戟原因說」を證明すべく、人工的に家兎に乳癌を發生せしめられたのである。詢に多年の忍耐と研究との結果である。しかも實驗動物數は四十六にして、成功せしものは其の中、僅、三例であると聞く。併し、何にしろ、其の證據を實現せしめられたのであるから、事實は事實である。偉大なる業績である。事實である限りは三例でなくて、一例であつても十分だと思ふ。併し乍ら、讀者よ、假りに——余は特に注意しておく、只今余が之を疑ふものでないが、——假りに此の業績に疑念を挿くとしたなら、或はかう言へるであらう。「偶、其の三例に、本來、乳癌が存して居らなかつたか。人工的に試驗する以前に、既に其の素地が有つたのではないか。故に實驗としては、もつと〳〵、澤山實驗が出なければ不十分である」と。併し學界は忠實なる此の研究に向つて皆、一樣に敬意を拂つた。此れに於いて然らば、また余の上掲の如き貧弱なる三例に對して、それは「偶然」だとか、「暗合」だとかの一言で冷笑し去る人は、まづ、

無いことゝ期待する。何となれば苟くも學者に於いては「偶然」乃至「暗合」てふ如き遁辭は許されぬ筈であるから。彼は必ずや、因果律を信じて、其の然る所以を闡明すべきものであるから。

凡そ物理や化學の實驗に於いても、はた心理學の實驗に於いても、決して十遍やつて十遍とも同一の成績を見るものでない。當然出て來ねばならぬ結果が、或は反對になり、或は出て來ない。かゝる錯誤は常に免れぬ事である。況んや靈妙複雜なる心理、しかも其の異常、奇特の際の現象を研究するのは、難中の難である。常人が、平素大變おしやべりであつても、人中に出ては氣臆して一言も發し得なかつたり、名畫工も氣が進まなかつたら、さつぱり運筆の自由の無かつたりするのは常に實見する所である。況んや、元來、日常茶飯の事に屬せぬ心象の研究をや。猥に之を否定し去るべからず、又輕忽に之を妄信すべきでないが、余は上述の如き經驗が追々有るが爲に、寧ろ、心靈交感の妙作用を信ぜんとするものである。從つて、世間に所謂幽靈は傳說で

あらうが、小説であらうが構はぬ。余の信ずる原理の上からは、當に有り得べきこと
と結論しなければならないのである。

三　病的の妄想妄覺等に因る幽靈

併し原理は是くありと雖も、我等研究者はまた常に元來病的の幻想妄覺あることを忘れてならぬ。即、物無き空處にもののけを見るのは幻視なるべく、聲を聞くのは幻聽にして、かゝる類を總括して幻覺といひ、又竿に掛ける白衣を幽靈と視、風の音を怨みの聲と聞くは錯視並びに錯聽なるべく、之を約言して錯覺といふ。又、幻覺、錯覺をも概括して妄覺といふ。これと同樣に妄想もまた存する。而て此の種の病的心理現象は、通常、最、頻繁に精神病者の類に發するので、世人の幽靈を否定する者も大低此處にのみ因はれてゐるのである。余は此の例となるべき物語を左に夜窓鬼談の下卷から引かう。世間の傳說も亦、此の邊の要素が有力に參加して發生するのである。

(8) 左圖は郵便報知新聞第六百十四號の論なり。大阪の强盜小傳法庄吉が怨靈に惱まさるゝ圖

福本某は淺草の豪賈也。性諸技を嗜み、別に友雅と號す。別墅を小梅村に構ふ。暇有る時は優人歌妓楳客幇間等を招き、花を觀、月を翫び、以て遊戯に耽る。一日劒客勇二なる者來つて告げて曰く、根岸の橐駝師、多く蕙蘭を培養す。綠葉白瑳中に紫帶を雜ふ。蓋し無比の異種也。君盍ぞ一觀せざる。友雅最も盆花を愛す。將に往いて之を購はんとす。偶、幇間頑孝なる者亦來り相與に閑步し、根岸の里に到る。到れば則、橐駝家に在らず、其の妻に請うて園に入つて縱觀す。諸花爛漫、各稀世の品也。慽むらくは主無し。再來を約して去る。時將に晡ならんとす。乃ち一酒樓に登りて飲す。宴已に酣なり。頑孝嘯唳滑稽、人をして頤を解かしむ。勇二曰く鄰舍に一女有り、技藝精しからずと雖頗る姿容あり。之を聘せば以て酒宴を扶くべし。友雅亦好色の癖有り、急に之を迎へんと欲す。勇二曰く請ふ僕往いて伴ひ來らんと。之を久しうして漸く來る。三七を過ぐ。明眸綠黛、嬌娜人を惱殺す。服、甚、麗ならずと雖、亦甚、野ならず、紅粉を施さずして皓として白玉の如し。友雅大に喜び乃ち一

曲を乞ふ。固辭して唱へず、頑孝亦頻りに請ふ。婦人已むことを得ず、絲を調べ彈歌す。鶯聲宛轉人をして悲喜せしむ。友雅杯を勸めて其の籍を問ふ。婦人赧然首を低れて言はず、勇二曰く是の婦は實は旗下の士某氏の細君也。父母已に沒し、夫も亦微罪を得て職を罷む。幾もなくして重痾に罹り、年を經て沒す。親戚の之を養ふなく落魄して此に至り、僅かに絃歌を以て兒女に敎へ口を餬するのみ。友雅聞いて之を憐み、數金を惠んで之を慰む。且其の恣色を愛戀し、流涎、還ることを思はず、連りに數盃を傾け、玉山將に頽れんとす。時已に二更なり。頑孝亦酩酊す。殆ど步す能はず、勇二婦と謀り、友雅を一室に臥せしむ。頑孝も量を過して臂を枕にして沈睡す。夜半驀然として覺め、婢を呼ぶに、婢來らず、燈を剔りて友雅を求むるに其の臥する所を知らず、以爲へらく婦と溫柔鄉に睡るならんと跼蹐して之を窺ふに聞として鼾聲なし。燭を照らして之を見るに、友雅は仰臥して、衣褥狼藉たり。頑孝之を怪しみ、近づきて視れば殆、死者の如し。之を撫すれば冷なること氷の如し。

頑孝大に驚き、急に家人を呼びて之を告ぐ。一家慌忙として勇二及婦を求むるに在らず。蓋、勇二は婦と謀りて友雅を縊殺し、金を奪うて奔りし也。婦、勇二を伴ひて居に歸り、囊を檢すれば僅かに三十餘金のみ。意、甚、慊らず。然れども、大罪を犯すを以て、府下に潛居すること能はず、一二の衣服を脊ふて勇二と常の銚浦に至り、一知己を尋ねて、寓すること月餘。囊中既に罄く。殆、饑渴に逼り、遂に一酒樓に投じ、娼妓と爲し、名を華と改む。勇二、些金を得て、再び江戸に來り、幕下の士某氏の僕となる。時に明治の初、官軍幕府に逼り、壯士黨を結んで、大に上野に戰ふ。勇二亦其の主と彰義隊に加はり、丸に中つて亂軍の中に死す。其の友虎次なる者、本と銚浦の奕徒なり。與もに某氏に事へて馬丁と爲る。某氏の戰沒を見て、身を挺して潛んで農家に匿れ、逃れて銚浦に歸り、後、奕を以て業となす。一夜酒樓に登り、華を聘して談、上野の戰事に及ぶ。華是に於いて始めて勇二の戰死を知る。然れども、毫も悲まず、反つて贅疣を去るの思ひを爲しぬ。是より先き商家の保傭才

助なる者有りて、華を寵して屢、此の樓に遊ぶ。華之を奇貨とし媚を逞くして、以て其の心を蕩かす。騙術の巧みなる、忽ちに古板の人をして放心の徒たらしめ、爲に主家を費やし飯鍋を打破するに至る。迷夢未だ醒めず、匕首を携へて華の家に至り、同じく死を謀らんと請ふ。華欺いて曰く、刀を以て身を刺さば或は速に死せざる者あらん、且衣服を皺して潔からざるを覺ふ。若かじ、水に沒して速かに死せんにはと。才助之を可とす。其の夜更深、海岸に至り、潮候を俟ちて沒す。華素より水に熟する者なり、潛かに波を泅ぎて家に歸り、唯、夏衣一領を濡すのみ。翌又宴に侍して媚を鬻ぐ、人得て知ることなし。奕徒虎次、連りに捷ちて攫擊し大に囊橐に充つ。華を愛して日夜之を寵せしが、遂に債を償つて妾と爲す。華、性酒を好み、醉ふときは則、裸體にて舞踊し、醜態見るに忍びず。虎次屢叱責し、鞭撻を加ふるに及ぶ。華懲りずして之を久うして酒毒漸く發す。加ふるに癩病を以て髮脫け、肉爛れ、臭穢近くべからず。虎次益、之を厭ふ。醫を迎へ、藥を與へず、且連日敗を

取りて米鹽將に盡きんとす。華、病に苦み又貧に苦む。死せんと欲して死する能はず。一夜戸を開いて厠に上らんと欲すれば、水盤の傍に人ありて屹立す。諦視すれば友雅と才助となり。華、愕然、一叫して房に入る。是より夜々次兒を見て、身神益慄る。而て虎次は債を逃れて出奔し、債主來り促す。唯、病婦一人臥するのみ。隣人之を恤み時々粥を煮て之に貼る。村中に一老僧あり、專ら慈善を修す。其の將に死地に陷らんとするを聞いて醫をして之を診せしめ、藥を與へ療を加ふ。是に於て病稍痊ゆることを得たり。然れども、紫黑斑と爲り、鼻陷り、口曲り、復舊態なし。僧以爲らく、是必ず舊惡ある者にして、故に業を此の世に果すならんと。因つて尼となして去らしむ。

是より先き友雅二凶の爲に縊られて、其の夜、轎に乘じて家に還り、諸醫を招きて之を診せしむるに胸間少しく暖氣有り。乃、湯を注いで藥を含ましめ、天明に甦るを得て、一家大に喜ぶ。頑孝及び優人俳歌香茶の諸友、日に來つて之を慰す。二句

を經て全く癒えたり。

才助亦漁舟の爲に救はれ、幸に舊里人なるを以て伴うて家に還へり、父母の命を全くしたるを喜びて、厚く漁夫に謝したり。再び故主に還らんと欲せしが、其の多く金を費やして、謝するに辭無きを以て、江戸に到り商家に事ふることを勸む。乃、緣を求めて圖らず福本氏の傭となる。前事に懲りて、尤謹愼せり。居ること三年。主人殊に之を愛す。主人は則友雅なり。友雅、偶、春暖に乘じて善光寺に詣でんと欲す。頑孝及才助健僕二人行李を擔ひて從ふ。幽を討ね勝を探り、行步、甚樂む。數日を經て長野に抵る。春和の候、香を行ふ者甚多し。星貨、肆を連ね百戲、場を設く。友雅數人、佛龕を拜し堂を下るに、一尼ありて鉦を叩いて佛名を唱ふ。才助之を見れば、尼亦之を見る。忽、顏色を變ず。尼、復、友雅を見、畏怖して之を避けんと欲す。才助走りて之を捕へ、汝は華に非ずやと。尼の曰く請ふ之を免せ、妾今や此の如し。已に佛門に入れり。君亦怨みを忘れて速かに成佛せよと。友雅之を

怪んで問ふ。是何者ぞと。尼の曰く、君尙迷ふか、願くは罪を免じ共に佛と成れと。友雅熟視して曰く、豈是れ根岸の人か。何ぞ此の如きに至ると。尼、唯合掌して佛名を唱ふるのみ。才助曰く汝、我を死せりと思ふか、我未だ死せず、主公亦未だ死せざるなり。尼の曰く然らば則、二君は在世の人か。何ぞ、屢、形を顯はして妾を惱すや、恐らくは人に非らん。友雅笑つて曰く、此れ自ら神經を惱まして瞎眼の見る所なり。我曹何ぞ人を惱ますことを爲さんや。汝舊惡を悔いて此に至る。詢に感ずべしとなす。因つて備さに蘇生の事を說く。尼、流涕漣如、只舊惡を謝するのみ。友雅之を憐みて厚く惠みて還らしむ。

此の話の如く神經を惱まし、又精神に狂ひの生じたものにに、隨分烈しい怖ろしい妄覺がある。されば、たとひそれが小說であつても、傳說であつても構はぬ。更に此の點を捕へて之を民族心理學的に研究する必要がある。

第三章　幽靈傳說の心理

一　近世の代表的幽靈

「エヽ、さては誑されたか口惜しや。病に臥し及に伏し、火水に死するはある慣ひ。殺しやうもあるべきに、雪に凍やし殺さんとは、をのれ入道奴、むざ〳〵とは死ぬまい」

と侍女の中川が二十歳の春の花、待ち敢へず、雪に先立ち、消えける末期の怨念、凝つて近松が靈筆、雪女五枚羽子板の中に現れ出る。

「東南に雲起つて、西北に風靜ならず。夕暗の空も轟く雪の夜の、あら物凄の景色やな。斯波左衛門義將は『今宵しも小水龍の、おのれと音を出す不思議さよ。君の御事氣遣はし』と、人馬も具せず藤内一人、提燈ともさせ、雪踏みわけて、赤沼が門

(9) 小幡小平次の亡靈

(10) 牡丹燈籠(北齋の筆)

の此方に着きけるが、俄に持せし提燈の、吹消す樣に消えてけり。塀の内より白鷺の飛ぶ如く、雪渦いて提燈に映ると齊しく女の姿。白衣白髪白妙の、雪女とも謂つべし。左衛門主從、太刀の柄に手をかくれば『なう見忘れ給ふか藤内殿。互に忍びて落合の、漏さぬ水は御身と我、思ひ二つの中川が幽靈是れまで參りたり。口惜しや赤沼親子逆心にて、君の御判を奪ひ取り、みづからには御太刀を奪はせて、左衛門樣我夫にも、其の科覆せて失はん謀計と知らで盗み出る、道の前後錠おろし、今宵の雪に埋れて、凍やかし殺されし、此の世からの八寒の苦患は我身一つにて、いとし可愛の我が良人、主從の御命助けたや救ひたやと、思ふ一念凝りつき、只今知らせ申すぞとよ。此の御太刀義敎へ差上げ、御身の分疏立て給へ。名殘惜しの我が夫や。此の世の緣の薄雪も永き契りは厚氷結添へ〳〵、生々世々にも解けじ。さらば〳〵』と泣く涙の霙と消えて亡せにけり」

これは今から二百十四年前に書かれたのであるが、それから降つて約百年後、即、今

から百十三年前の幽靈譚としては、山東京傳の稻妻表紙に左の如き文がある。――まづ其の發端は忠義の三八郎が主君の迷はせ給ふ色香の根をば絶たんとて、白柏子藤波が今しも、手燭照らしつゝ、濃紫の小袖の褄を取り上げて退き來るを、長廊下にて暗討ちし、『さても科なきおことを無體に殺せし不便さよ、南無阿彌陀佛』と吊ひて、一時、こゝをば出奔と、荒にまぎれて走せ歸り、身仕度そこ〳〵に、たくはへの金子を懷中し、おのれは今年十二歳になる楓といふ娘を背負ひ、妻には七歳になる栗太郎といふ男子を負はせて、夫婦忍びやかに後門よりぞ逃れ行く。――

「四方暗々として東西を辨せず。雨はやゝつよく降つて篠をつかぬるが如くなれども、雨衣をだに身につけねば、濡衣足にまとひきて歩みがたく、素足なれば、道ぬめりて心のみ前に走り、身はあとへ引かるゝ心地し、おぼえず背後を顧れば、怪い哉、心火パッと燃え上り、藤波が姿かげろひの如くあらはれて、行くをやらじと引き留む。三八郎、此の時、身中ぞつと冷えとほりけるが、刀を拔いて斬拂ひ、妻の

手を取り行く向へ、又パッと炎燃えて藤波が姿すくと立ち、尙もやらじと支へたり。妻子の目には見えねども、三八郎が目前には、幻の如く附きまとはり、此處に現れ、彼處に立ちて、斬れど拂へど立ち去らず、勇氣烈しき三八郎も、身うちしびれ足なへぎて走ること能はず、妻の磯菜も諸共にたぢ〳〵と引戻され、髮も亂れ、もすそも破れ、身體すくみて倒れしが、やう〳〵心を勵まして、百歩許りも逃げ行く時、烈風颯とおろし來て、大粒の雨つぶてを、打つが如く降りかゝり、一團の心火、あとを追ひて飛び來り、見る〳〵空中にて二つに分れ一は娘、楓が懷に入り、一つは栗太郎が懷に入りぬ。

上掲二種の幽靈中、前者は怨みの言葉を述べるが、後者は唯、幻影として目に現れるのみ。併し、陰火が飛廻りて其の凄味は一入である。現今傳へらるゝ幽靈も大凡、右の孰れかか又は其の兩者を併せ、即、目にも見え、耳にも聞え、且陰火も伴ふ如きものである。

今、是等の近代的幽靈を、中世乃至上古のと比べると、著しく形式の分化、隨つて意味の複雜さを增して居る。即、意味に於いては近代的のものは怨靈思想に因るものが多い。

無慙の横死を遂げたとか生前非道の虐待を蒙りし爲、其の憤懣遺る方なき敵乃至其の一族に向つて祟りを行ふといつた風の幽靈思想は近代に於いて最著しい。尤、何種の思想にしろ、截然と時期を劃して其の出沒を分つ如きは有り得べからざることで、實の民族其の社會の思想は漸次的に前代より傳承して來たものである。されば此の怨靈觀念にしろ、陰火思想にしろ、又同じく其の痕迹をば遙か上代まで跡付け得る。余は後文に此の點を解說するつもりであるが、手近かの例で言つても、前篇に引いた平の知盛の怨靈の如き、又六條の御息所の生靈の如き、皆、其の當時の思想を表はしてゐる。併乍ら中世の謠曲に描かるゝ幽靈の如きは、其の多くは寧ろ或る一人、一定事に對する怨念といふよりも現世に對する執着妄執として取扱はれてゐる。換言すれば

此の時代の幽靈は、たとひ怨恨を有せりとて、しかも未だ德川時代に於ける如く、對個人的でなく隨つて深刻でない。之に反して其の軍記物語などに表はるゝ幽靈思想は、其の形式は寧ろ妖怪的の畸態にして、且團隊的のことが多い。余は「船辨慶」に謠ふ如き知盛の幽靈も純粹の幽靈として取扱ふを躊躇するのであるから、況んやお化けの形態を呈するものは、余の幽靈論には入らず、當に妖怪論中に編せらるべきものと解する。けれども、兎に角幽靈てふ點から見れば、せひ之を一言せねばならぬし、又、後世の靈魂觀發生上に影響があるから、一應、左に略叙しておかう。太平記の卷第二十三には、

「猿樂已に半なりける時、遙なる海上に裝束の唐笠程なる光り物、二三百出で來る海人の繩燒く漁り火か、鵜船に燃ぼす篝火かと見れば、其れにはあらで、一村立つたる黑雲の中に、玉の輿を舁連ね、懼しげなる鬼形の者共、前後左右に連りたり。其の跡に色々甲うたる兵百騎許、細馬に轡を嚙せて供奉したり。近くなりしより、

其の貌は見えず。黒雲の中に電光時々して、唯今、猿樂する舞臺の上に差し覆ひたる森の梢にぞ止りける。見物衆みな肝を冷やす處に、雲の中より高聲に大森彦七殿に申すべき事ありて、楠の正成參じて候ふ也とぞ呼ばはりける。」

これは正成の怨靈である。武文の怨靈なるものは、同じ太平記の卷第十八にある。曰く、

「さらば僧の儀に附いて祈をせよやとて、船中の上下、異口同音の名號を唱へ奉りける時、不思議の者共、波の上に浮び出でゝ見えたり。先づ一番に濃き紅著たる仕丁が長持を舁きて通ると見えて打ち失せぬ。其の次に白葦毛の馬に白鞍置きたるを舍人八人して引いて通ると見えて打ち失せぬ。其の次に大物浦にて腹切つて死したりし右衛門府生秦武文、赤絲威の鎧、同じ毛の五枚兜の緒を縮め、黄鳩毛なる馬に乘つて、弓杖にすがり、皆紅の扇を擧げ、松浦が船に向つて、其の船留まれと招く樣に見えて、波の底にぞ入りにける。梶取是を見て灘を走る船に、不思議の見

ゆる事は常の事にて候へども、是は如何樣、武文が怨靈と覺え候。云々」

又、其の第三十三卷には崇德院の怨靈が細川伊豫の守繁氏に祟る由を書きて曰く、

病附いて七日に當りける卯の刻に黄なる旗一旒差して、混冑の兵千騎許り、三方より同時に鬨の聲を揚げて、押寄せたり。誰とは知らず敵寄せたりと心得て此間馳せ集りたる兵士五百餘人、大庭に走り出で散々に射る。箭種盡きぬれば、打物に成つて追つ返しつ半時許りぞ戰ひたる。搦手より寄ける敵かと覺えて、紅の母衣掛けたる兵士十餘騎、大將細川伊豫守が首と家人行吉掃部助が首とを取つて、鋒に貫き惡しと思ふ者をば皆打取つたるぞ。是看よや兵共とて、二つの首を差上げたれば大手の敵七百餘騎、勝鬨を三聲どつと作つて、歸るを見れば、此寄手天に上り雲に乘じて、白峰の方へぞ飛去りける。變化の兵歸り去れば、之を防ぎつる者共討れぬと見えつる人も死せず、手負と見えつるも恙なし。こはいかなる不思議ぞと互に語り互に問ひて暫あれば、伊豫守も行吉も、同時に墓無く成りにけり。

右に引例せし如く、此の太平記の書かれし時代、即、上には諸行無常の實例を源平の興亡に觀て、下には弱肉强食の亂世を釀さんとしつゝある、人心的にも世相上にも、最不安定なる此の南北朝時代の亡靈觀は、また實に其の形式が混雜してゐる。既に平安朝時代に存せし幻影的の「もののけ」思想に加はるに、戰陣の影響を受けて、其の現るゝや異形のものゝ團體である。現世ながらの修羅道に横死を遂ぐる軍兵に對する怨靈思想は特に著しく現れて、しかも未だ近古に於ける如き個人的の幽靈とまでは、完成しない。だから其の怨靈の形貌は極めて恐ろしきお化けの樣なものが多いのである。此の思想が其の儘に後引きたりと見ゆるは、德川時代の末葉に書かれし雨月物語にある左の怪談である。

「朕（崇德院の靈）も其の秋世を去りしかど、猶瞋火熾にして盡きざるまゝに、終に大魔王となりて、三百餘類の巨魁となる。朕が眷屬のなすところ、人の福を見ては轉して禍とし、世の治まるを見ては亂を發さしむ。只清盛が人果大にして、親族

氏族ことごとく高き官位につらなり、おのがまゝなる國政を執行ふと雖、重盛忠義をもて輔くる故、いまだ期に行らず。汝見よ。平氏も亦久しからじ。雅仁朕につかりしほどは終に報ふべきぞとは聲いやましに恐しく聞えけり。西行いふ。君かくまで魔界の惡業につながれて、佛土に億萬里を隔て給へば、再びいはじとて只默してむかひ居たりける。時に峰谷ゆすり動きて、風叢林を偃すが如く、沙石を空に卷上ぐる。見る〳〵一段の陰火、君が膝の下より燃え上りて、山も谷も晝の如くあきらかなり。光の中につら〳〵御氣色を見たてまつるに、朱をそゝきたる龍顏に、荆の髮膝にかゝるまで亂れ、白き眼を吊りあげ熱き嘘をくるしげにつがせ給ふ。御衣は柿色のいたうすゝびたるに、手足の爪は獸のごとく生ひのびて、さながら魔王の形あさましくもおそろし。空に向ひて相模々々と呼ばせ給ふ。あと答へて、鳶の如くの化鳥翔來り、前に伏して詔をまつ。院かの化鳥に向ひ給ひ、何ぞ早く重盛が命を奪うて、雅仁清盛を苦しめざる。化鳥答へていふ。上皇の幸福いまだつきず、重

盛が忠信ちかづき難し。今より干支一周を待たば重盛が命數既につきなん。彼死せば一族の幸福此時に亡ぶべし。院手を拍つて喜ばせ給ひ、かの讐敵ことゞく此前の海に盡すべしと、御聲谷峰に響きて凄じさ云ふべくもあらず。

併し乍ら右の文は、余が既に太平記より引用したる崇德院の怨靈譚に想を得たものであるから、勢是くなる筈で、決して德川時代以後に於ける定型的の幽靈でない。然るに世人は往々、其の定義の範圍を一定せずして、或は怨靈、或は幽靈等として其の意義を混雜せしめてゐたやうである、讀者は右の如くに各時代の各種の型式を見ると、おのづと其の間に分別すべきもののあるを認められるであらう。

二　幽靈思想の基本觀念

日本人の幽靈思想に就きては、余はまづ上古以來全時代に亘りて著しきものを擧げ得たと思ふが、然らば如是思想は元來如何にして發生し來るか。之を民族心理學より

見たらば如何？　世界の各民族に於ける風習や信仰を旁々參照すると甚、面白い研究になる。左に之を説かうと思ふ。就いては、現今に於いて我等が考ふる「幽靈」なるものゝ中には、如何なる要素が含まれてゐるかを、まづ解剖しておかねばならぬ。

第一に人間には靈魂なるものありて、肉體の羈絆を脱し得ること。及び靈魂は肉體死滅後も存續すること。而て。其の嘗て得たる經驗をよく記憶して、其の憾む處に報復を企て遺恨を懷くこと。――以上諸項を約して云へば肉體を離れたる、あらゆる人間的精神活動の肯定で、つまり一種の靈魂觀念である。

第二には左の如き靈魂の活動は、肉體的の幻影を表はし乃至人間的言動に出づる事。

第三には陰火が幽靈に伴隨すること多く、否、幽靈の一部なる如くにも考へらるゝこと。

以上の三條件は更に短かく約して曰はゞ、靈魂の轉生觀念と、人間的活動を有する幻影と陰火とである。然らば此等の三要素は民族心理に於いて、如何樣に發達し、ま

た相ひ聯結するに至りしか。

三　靈魂思想の諸學說

抑、靈魂觀念に關して上述の如き思想は決して一朝一夕に未開人の腦裡に發生したものではない。追々、其の然るべき發達の經路を以てしたのである。而て今日地球上に人類として棲息するもの、文化の發達の極めて著しきあり又遲きあり、習俗の變遷また劇しきあり、然らざるありて、之を一時に眺むる時は實に各種各樣の思想を認むべく、又同一種族に於いても、上古の信仰は多少の變形を以て後代の迷信中に名殘りを留むるものもある。されば其の各思想の名目のみを擧ぐるも、或は自然崇拜、或は偶像乃至生殖器崇拜、或は怨靈乃至轉生の觀念、其の他曰く「タブー」曰く「トーテミズム」曰く祖先崇拜等と學者間に論說せらるゝもの亦、枚擧の遑も無い。併し乍ら、右の如き種々の思想は決して百花の春に逢ひて、一時に爛漫と咲き出づるが如くに勃

發したのではなく、幾百年、幾千年の世代を更へ、幾多の事變に遭遇して、相互混淆錯雜しつゝ今日に至つたものである。此處の消息は之を言へば極めて解し易きが如くにして、しかも之を念頭に措かざるが如き論者あり、又其の鑑定の正鵠を得ざる學者ありて、未だ徹底的の說明を見ない、是れ時代の錯誤もあり、又文明人自己の感情を以て彼等を見るからである。而て余は、此の點を釋然たらしむべく、別に一篇「靈魂論」を書きて、本文に續け、更に怨靈論を第三篇として、前論を承けしめ、其の中に、陰火の事を詳しく書いておいた。さればこゝには幻影思想につきて一言しておかう。

幽靈の姿態の幻影的なるは、其の主たる原因は夢より來るものと思はれるけれども尙、其の外に幻覺や錯覺、妄想乃至、彼等に漸く發達し來る創作的想像の類も當然、彼等をして此の靈魂觀を信せしむる。我が上古史上では、例へば崇神天皇の條下に、

「故大毘古命高志の國へ罷り往す時に、腰裳服せる小女、山代の弊羅阪に立てりて歌ひけらく、

こはや、御眞木入日子はや、御眞木入日子はや、己が命を竊み弑せむと、後つ戸よ、いゆき違ひ、前つ戸よ、い行き違ひ、窺はく不知と、御眞木入日子はや。

こゝに大毘古命怪しと思ひて馬を返して其の少女に「汝が謂へる言、何に言ふことぞ」と問ひ給へば、少女「吾、物言はず、唯歌をこそ詠ひつれ」と答へて、即行方も見えず忽に失せにき」

余が此の文を引いたのは、幽靈の姿態が幻影的にして、ふと消え失する性質に關して既に崇神天皇時代の口碑中に、是の如きものの存することを示す爲である。また左の歌どもをも玩味せられよ。

朝影に我が身はなりぬ、玉蜻髣髴に見えて往にし兒故に　（萬葉集卷十二）

燈火の影に耀ふ虛蟬の妹か笑ひし面影に見ゆ　（萬葉集卷十一）

如何に讀者よ、既に幻影乃至幻影的のものを謠へる文學も奈良朝以前の時代に證明し得る。若し夫れ陰火と靈魂觀發生の心理につきては、第二篇以下を見られよ。こゝ

には暫く理論を已めて、古今東西の幽靈譚を蒐めやう。讀者もつれ〴〵の時之を讀まれて宜しからう。併乍ら又飜つて思ふに、既に余が論述せし通り幽靈は實在し得るものであり、又病的にも存する以上は、之を核心としたる傳說も當然產れ出づべきものである。而て民族心理の研究者にはこれまた有用なる好資料である。

附論　日本幽靈の額烏帽子

近古の幽靈畫には、額烏帽子とて、三角に折りし紙を額に當て、白衣を着てゐる姿がある。是はもと死人の額に之を用ゐて「卍」の字若くは「シ」の字を書き記し、又送葬の親近者は文字を記さざる額烏帽子を用ゐたのに由來する。現今でも余は關西で此の風を見た。勿論他の地方でも殘つてゐるであらう。

されば幽靈の繪に額烏帽子を畫くのは、其の死者たるの表徵とするので、又其の起源は恐らく室町幕府以後、特に幽靈思想の盛んになりし時代の事であらう。かの額烏帽子は始めて鳥羽僧正の鳥獸戲畫や光長の伴大納言繪卷に見えてゐるから平安朝末期には既に存し、かの立烏帽子といふものゝ變形せられしものと考へられる。

第四章　幽　霊　譚　集

一　傳説としての野蠻人乃至文明人の幽霊

1　外國の幽霊傳説

一　復讐を望む幽霊（スコットランド）

左に敍べるのは、スコットランド高地方の幽霊譚で、エルスペッ、キャムベル（Miss Elspeth Campbell）嬢が、インヴェラウエ Inverawe に於いて、聞き書きしたるものによる（A. Lang: Dreams and Ghosts）

「時は一千七百五十五年の或る夏。英國の軍人として出征して、カツロデン Culloden に戰ひたる、インヴェラウエ、キャムベル氏は、此の時クルアチャン（Cruachan）丘の中腹に居つた。其の處へ目掛けて一人の男が全速力で疾走してくる。しかも全

身血みどろになつて、苦しき息で叫んでゐる「助けて呉れ！　敵討の奴が追つ掛けて來た！。」俠氣ある彼は之を憐れと思うて、「よし、インヴェラウエの此の一言、敵であれ味方であれ。屹度助けてやらう程に」と言つて、彼をばクルアチャン丘の隱れ穴に入れてやつた。此の穴は此のイヴェラウエの領主たる彼以外には、誰も知る者がない――こゝに注意しておくが、インヴェラウエは元來土地の名で、キャムベル氏が當代の領主であるが、此の穴の秘密と共に、先祖代々、今に傳へられ、其の人を呼ぶにも直ちに、其の領地の名を以てしてゐるのである。――此の穴は外見小さなもので、狐の棲家程にしか見えぬが、中へ這入れば、立派な室が幾つもあつて就中、其の一室には清凉の泉水が湧き出でゝをる。

今、彼が此の男をこゝにかくまつて、自分は外へ出やうとすると、彼は其の着物に取り縋がつて淋しいからこゝに居て下さいと哀願する。インヴェラウエは此の臆病な振舞を見て、こんな卑怯者なら助けてやるでもなかつたと後悔したのである。

偖、彼は自分の居所へ戻つて來ると、一人の男が、非常に亢奮した樣子で、其の歸へるのを待つてゐる、「今、貴殿の乳兄弟は、マクニヴエン(Macniven)といふ奴の手に殺されました。私は此處まで其の路追つて來たのですが、僅かの處で見失ひました。多分、あなたにもかくまうて呉れていふかも知れませぬから、宜しく御注意申上げます」と述べた。之を聞いて彼は顏色更へて、答ふる術を知らなかつた。けれども對者は此の表情を以て、唯、乳兄弟に對する悲痛の爲と取つて、又、更にマクニヴエンの跡を追ふべく出立した。

彼の出で行きし後は、インヴエラウエの心は全く落付かなかつた。今や乳兄弟の敵なるかの卑怯なる男に對する憎惡の念は强大の力を以て、彼の心を支配するに至つた。けれども又彼は助けてやらうと約束をした武士の一言を重んじた。其の夜彼は食物を運んでやつて、之をいたはり、明日はもつと澤山持つて來てやると云つた。

彼は疲れてゐるから、己が住家に戻り來るや、すぐ就寢しやうとした。が、どうしても寢付かれぬ。今度は起き直つて書物を讀み出した。するとサーッと頁の上に影がさした。顏を上げて見ると、我が身側に、乳兄弟が立つてゐる。けれども、まあ、無慙なる姿！　頭髮も血に塗(まみ)れて固(かたま)り、顏色蒼白く、打ち沈みて、着衣も全く赤けに染んでゐる。彼曰く、「インヴエラウエよ、あの人殺しをかばうなよ。血は血で報へ。」かく言つて其の姿は消へ失せた。

インヴエラウエは、それでもまだ其の一言を固く守つて、翌朝、食料を惠むべく、彼(か)の男を訪れた。所が其の夜、又もや同じ亡靈現れて「インヴエラウエよ。インヴエラウエよ。あの人殺をかばうなよ。血は血で報へ」と言つた。此(こ)に於いて彼も決心して翌朝早く、其の男の潛む處へ行つて「もう、おれはお前をかくまつてやることが出來ぬ。できる丈早く逃げよ」と告げた。これで亡靈の妄執は晴れるかと思うてゐると、矢張り其の夜にも出て來た。そして如何にも怨めしげに曰く「あれ程度

々言つたのに、貴様は聽かなかつた。もう仕方がない。然らば此の次はチコンデロガでお前と逢はうよ。覺えて居れ。」

此の夜の明けるを待つて、敵の隱れ家へ走つて行つたが、もうマクニヴエンは居らなかつた。其の夜から幽靈は出なくなつたが、併し爾來、インヴエラウエの性格は一變して、甚沈鬱な人間となり、絶えず何か遠方のものを眺めてゐるやうに見えることもあつた。

一千七百五十六年、アメリカに於いて英佛軍の衝突ありて、第四十二聯隊は動員されて、同年六月に紐育に上陸した。此の時、インヴエラウエ、キャムベルは、其の聯隊の陸軍少佐でフランシス、グランドが陸軍中將であつた。

彼の軍はアルバニイに進み、一千七百五十七年の春まで其處に居つた。

併し運命の手は豫定通りに事を運ぶ。其の翌、一千七百五十八年には、ヂョルジ湖邊のチコンデロガに進軍の命が下つた。けれども、長官は、インヴエラウエをして

其の行く先きを明知せしめなかつた。これ彼のかねての事情を知つてゐたからである。最初は何等の抵抗もなく、其の六月の初旬には、同湖の對岸に上陸し、爾後多少の衝突もあつたが、味方の軍は進擊を續け、其の十日には愈々哨兵間の戰爭が始まり、やがて擲彈兵、砲兵も參加するに至つた。インヴエラウエの軍と第五十五聯隊とは豫備であつたが、漸次形勢險惡となつて、此のスコットランドの軍人も陣頭に立つことゝなつた。味方は十字砲火を浴び彈丸雨飛の間を潛つて、敵壘に突擊するが、將棊倒しに全滅される。此の時、インヴエラウエは祖國の大刀を揮ひて勇奮突進したが味方利あらず四時間の後にアベルクロムビイ將軍は退却を命じねばならなかつた。此の戰鬪に於ては、インヴエウエは遂に致命傷を蒙つて戰死した。其の臨終の時、グラント大佐は之を見舞うと、さも恨めしげに彼は言つた。「此の場所はチコンデロガでありました。私は彼の姿を認めましたから、さうに違ひない」と。

此の時、同じく彼の息子も軍人であつたが陣沒したのである。

こゝに不思議なることは、同じ日の同じ時、遠く離れて彼の故國で、エデレインのキャムブベル嬢及び其の妹は、キルマリウからインヴエラレイへ行くべく歩行中彼の女は、ふと空中に、各聯隊が軍旗を押し立てゝ、勇ましく進軍する處、乃至砲煙彈雨の下に諸將、兵卒の死傷する光景をさながらに幻視した。彼の女は驚いて、妹に語ると、妹も亦確かにそれを認めた。又、彼等の知人、殊にインヴエラウエ及び其の息の倒るゝ有り樣をも見た。尚又デンマルクの名醫、ウイリアム、ハアト氏も、某英人と下僕と同行中、此の現象を幻視した。」

2　布哇人の幽靈發見法

布哇に於いて、マノアManoa谿といふ處は、千古以來、虹の住ふ所となつてゐる。又此の谿の上に聳ゆる山々は神樣で其の子供が、風や雨である。そして風や雨の子に美しい虹姫がある。此の虹姫は霧の如き小雨(こさめ)そぼ降(ふ)りて、日光や月光に逢ふ時、感興涌きて夜でも晝でも此の谿口のあたりに遊戯してゐる。

土人は此の虹姫をカハラオブナKahalaopunaまたはプナのハラHala of Punaと云ひ、時にはカイカワヒネ、アヌエヌエ Kaikawahine Anuenue ともいふ。これは虹姫といふ意味である。そして虹(アヌエヌエ)の出る限りは、其の姫(カハラ)の生きてゐる證據だと信じられてゐる。

さて此の虹姫が幽靈發見の方法に關聯して、面白い傳說があるので、又その方法たるや大昔の布哇の魔術師が傳ふる所といふ。

美しい虹姫は二人の者に戀せられた。一人をカウヒKauhiと云つてワイキキWaikiki村の酋長、他をマハナMahanaといつて、カモイリイリ Kamoiliili 村の酋長である。此の村はワイキキ村と、姫の住處、アノア村との中間に當る。彼等二人の酋長は、各自、己が家に虹を架し、又、此の姫を棲まはせ度く思ひ焦れてゐた。

然るにカウヒは元來、沙魚(さか)の神たるモホアリイMohoalii の一族で、其の性も沙魚の如く殘忍であつた。姫が我が思ふ通りにならぬので、とう〳〵憤怒の心を發して彼の

女を殺し、其の屍骸を埋めた。こゝに彼の女の守り神、プエオ Pueo といふ梟があつて、其の土を掘りて、彼女を救ひ出した。こんな事が何度も反覆せられて其の度毎に、梟は、彷徨へる姫の靈魂を舊體に還へらしめたのである。遂には、かの惡酋長は、姫の屍骸を大きなコア(Koa)樹の下を選んで深く深く地中に埋めてしまつた。此の時ばかりは、とても梟の爪では之を掘り起すことが出來ず却つて、爪の方が曲りくねる有樣である。梟も、今や諦めて、もう姫の命は無いものときめて、其の骨折を已めた。

けれども、可愛さうに、中有に迷へる姫の魂魄は、どうかして元との身體に戻りたいものと願うて、亡者の行くべき地下の冥界ミルーMiluには旅立つを好まなかつた。それで迷魂は依然、其のあたりに彷徨してゐた。そして我が肉體が追々冷えて、堅くなつてしまふのを、やきもきと心配し、あせつてゐた。時にかのカモイリイリの酋長、マハナが近き來るのを認めた。やれ嬉しやと虹姫の迷魂は彼の身邊左右に附き纏うて自家の危難を告げやうと努めた。

マハナはこゝに胸さわぎを感じ、蟲の知らせで、例のコアの樹の處へ歩み來て、梟の神がほじくつた跡を見た。之を掘り起して見ると、打ちのめされた屍骸があつて、しかも、驚くべしそれは己が愛人の虹姫であつた。

マハナは取る物も取敢へず、兄を呼んで來た。兄はカフナ、即、巫醫で中々靈腕のある男であつた。彼は早速やつて來て咒文を唱へ、虹姫の魂靈を招き返へさうと試みたが。中々、虹姫は蘇生らない。彼は懸命になつてあらゆる秘咒を唱へ、知つてゐるだけの魔術を使うて努力しても矢張り駄目であつた。そこで最後の手段として、彼は、二人の姉妹の靈を呼び寄せて其の助力を乞うた。此の二人は既に死去して、今や祖靈として此の種族を加護冥助してゐるもので布哇語では、アウマクア(祖神)といふ。乃、彼等アウマクアは虹姫の靈魂を伴ひ來りて、之を其の屍體の足部から還入せしめやうとした。此の間にカフナは念力込めて祈る。かくしてだん〳〵と其の魂魄を體内へ押し入れて、やつと元との美しき宿り家に落着せしめた。

二人の祖靈もマハナに力を貸して、彼の女の傷口を手當した。今や此の美女と、若き酋長マハナとは、いとも親密に多くの日を共に暮らしたのである。併しマハナは思へらく、虹姫の身命は、彼れカウヒの生きてゐる間は決して油斷がならぬ。さればわざと彼を立腹させて喧嘩を買ひ、其の序に亡き者にしてやらうと決心した。それでマハナはカウヒの屢々出て來る塲處に待ち伏せて、散々の惡口を放ちて其の激怒を誘うた。彼は其の手に乘つて、眞青に腹を立てた時に、マハナは虹姫の事を持出した。遂にカウヒは虹姫暗殺の一件を自分から口外してしまうた。然るにマハナも亦、この時カハラ姫は實はまだ生きてゐて、其の姉妹と仲よく暮らしてゐると喋舌つた。

カウヒは之を聞いて曰く、若しもほんとに何者かが、お前の家に來てゐるならば、それはチト怪しい。正體の分らぬ奴ぢや、あの虹姫のカハラの死んだ事は斷じて疑ひない。然るに若しも其の姫を王及び各酋長の面前へ引き出して見せるならば、此の己は、生きながらイムス(布哇土人の火爐)の中に投げ込まれて、火焙りにされても構は

ぬ。此の廣言を聞いて、マハナは内心大に喜んだ。彼と喧嘩すれば、ヒョッとしたら返り討ちにでもなる虞れがあるが、かうなればこつちの勝利であるから。

偖、此の裁判の判官たる者は虹姫カハラの祖父アカアカ Akaaka である。戀の敵、カウヒの方でも用心をさ〳〵怠りない。或は何か計略があるかも知れぬとて、彼は一味の魔法使ひを召し集めて相談した。そして、マハナ派の有力なる巫祝(ふしゅく)が殺されたカハラ姫の亡靈を招き降して判官の目を眩ますとも限らぬから、まづ、其の際は亡靈なりや生者なりやを檢査することが肝心だと議決した。

彼等謂へらく、若し夫れが幽靈であるならば、冥界のミルー國から「亡靈捕り」と呼び寄せて、引つ捕へさせ、ミルーへ歸へればひどい罰を受けしめてやらうと。つまり亡靈取りとは、亡者の國から其の王ミルーの命を受けて此の世に來て居る者で、ともすると人界に舞ひ戻らうとする浮氣な幽靈を引捉さへては幽靈の本國へ伴れ還へる役目の幽靈である。

次に幽靈の正體を見露はす方法は如何？　カウヒ家の魔術遣ひは名案を出して曰く、虹姫の歩く道路に、或る「猿の木」といふ樹の大きくして纖弱な葉を敷撒らし置くがよい。さすれば、ほんとの人間ならば、とても其の葉を踏み破らずして通行できるものでない。けれども、それが幽靈ならば、其の葉は何の破損も受けないであらう。若し然らば、マハナは此の詐僞の罪を以て當に生きながら火焙に處せらるべく、又、若しも他の人間が、カハラ姫の替へ玉として出頭すれば、勿論、祖神、アカアカの目はそんな事で欺かれる事はあるまい。

一方、マハナ派に於いても必勝の用意萬端整へられて、火は赤々と爐中に燃え、土中に穴を掘りて、屍骸を投げ込む所とし、又其の上におくべき石材や木材も運ばれてある。

今日、幽靈檢分の日に、王及び酋長はズラリと正面に居並らぶ。多くの從者は遠く隔つて控へ、カウヒ及び其の一派の咒願師は、虹姫の通り路に近く座を構へて、仔細

に檢分すべく待ち構へてゐる。そこへ虹姫カハラは前と變らぬ優艶なる姿で、そろ〳〵と近づいて來た。其の兩側には、例の兩姉妹の幽靈が同伴してゐる。

彼等は、裁決場に踏み入るや直ちに其の魂膽を見拔いた。勿論、カハラ姫にとつては、何等怖るゝことはないが、一つ困つたのは、其の同伴者である。彼等二人は確かに魄靈の影向であるから、此の試みに逢つては露見を免れない。然らば敵方は直ちに「幽靈捕り」を來らせ、彼等姉妹は罰をうけねばなるまい。

姉妹の幽靈は、カハラに囁いて、行く〳〵成るべく幅廣く多くの木の葉を、しかも人知れずに踏み裂くやうに注意した。姫もよく之を合點した。今や衆目環視の中を、此の美しき三人は進み行く。分けても虹姫は、さも若々しく、又生き〳〵として一入うつくしく見えた。衆人は彼の女は正眞の、風と雨との子なる虹姫の生身に違ひなしと見定めた。

カウヒは案に相違して、くやしくてくやしくて堪らぬ。乃、更に難題を考へ出して、

曰く、「イヤ、どうも怪しい點がある。何だか、幽靈がカハラ姫についてゐるやうに見える。せひ之を檢査して貰ひたい」と。されば第二の裁決が行はるゝことゝなつて、山靈の神、アカアカAkaka は盥に水を汲み來らしめた。これ布哇土人の迷信として、顏面が水上に映ずるのは魂魄が體外に脫け出して反射するからであると考へてゐる。又、此の際、水面の顏を捕へて、兩掌に叩き潰せば、其のたましひは破滅せしめらると思ふのである。

偖、水盤は運び來られた。勿論、さうするのにはカウヒ黨の咒願師が斡旋した。併し却つて自分の顏も亦水面に映る事をうつかりしてゐた。そして水盤の上へ屈んで首を差し出した。彼の靈魂は身體を脫出した。こりやしまつたと思ふ時はもう遲い。アカアカ神は兩手をピシャリと水に叩き込んで、彼のたましひをつぶしてしまうた。即、カウヒ方の咒願師はあへなく死んでしまうた。

カウヒは、虹姫を慘酷な目に逢はしたといふ、廉で、火焙の刑を宣告せられ、あはれにも彼自身の領地ワイキキの火爐で燒き殺され、其の所領及び住民の一切は、カハラとマハナとに與へられた。今でも、其の子孫は昌へてマノア谿に住んでゐる。めでたし〳〵。

以上の虹姫物語に據りて、此の布哇土民一般が信ずる所の幽靈思想を知るべく、殊に、幽靈發見法として、二種の手段が書かれてゐる。而て、それにより一は木の葉の上を歩ませて、音するや、葉が破損するやを檢べ二は水面上の顏貌の映寫を彼等はたましひの水中に入つたものと思ふ事がよく表はれてゐる。

3　父、子の靈を尋ねて幽靈國に至る

（布哇人の考ふる冥界の情況）

ホノルゝの後方、マノア谿の地方に左の如き傳說が行はれてゐる。昔、此の谿の上流地方でオアフOahu島の最高の麓に當る地に一人の百姓、マルエ Maluae が住んでゐる。こゝは雨多くして、谿流地一體に土地豐沃なれば、作物がよく繁茂したのである。

彼はバナナや、タロTaroや甘蔗を作つた。バナナは小川の邊りに澤山實り、タロは小さき池の中に、睡蓮の如く一面に茂つてゐる。彼は根を煮て食物とするのである。甘蔗は乾燥の高地に作られてある——これは古代のニウジーランド土人はクマルKumaruと云うが、恐らく布哇から傳はつたものらしい——。

マルエは斯く四時に充分な食料を有つて安樂に暮らす事が出來るので、彼は其の採取する一部は必ず、神樣の前にお供へして、其の殘りを自分達が食べたのである。神樣をカネKane及びカノロアKanoloaといつて、彼の氏神といつた樣なものである。

マルエにカア、リイKaa-lii（ころげ廻はりの親玉）といふ名の愛子があつたが、名前の如く、甚、ふざける事のすきな、腕白小僧であつた。或る日の事、遊びつかれて大分腹もへらし乍ら神樣の祠の前を通るとおいしさうなバナナがある。早速これをごまかした。

さて二人の神樣は、いざバナナを頂戴しやうと來て見ると、何もない。彼等は大に

腹を立てゝ、早速、其の小僧の跡、追つ掛けて、バナナを頰張つてゐる所を引ひ捕へて殺し且、其の靈魂をば抽き出して、幽靈の國へ追ひやつてしまうた。——どうもひどい神樣もあるもので、これを以て見ても、野蠻人の所謂、神樣とは甚しく人間臭い、否、殆、人間と變りないもので、たゞ肉體に拘束されない性質の存する點が超自然的なのである——。

父親は畑の仕事を了へて、疲れゝ果てゝ歸へつて來ると、道でさきの神樣に出逢つた。神樣は彼の子供の一件を告げて、だから殺した上に地下の世界なる幽靈國へ追ひ拂つたと言つた。父は驚き悲んで、子供の屍骸を探し廻はつたが果して其の通りで、口にバナナを含んだまゝ、身體は横はつてゐた。

彼は此の身體を丁寧に、木の皮から製したカパKapaの布帛に包んで、家へ持ち歸り、まづ寢牀の上へ横へた。そして自分も子供の後を追つ掛けて冥土へ行かうとの決心で、一切食物を食べなかつた。これは、かうして己が靈魂が肉體を離れると、地下

の國へ自由に行けるから、子供の幽靈を探し尋ねて、其れから何處かへ一所に行つて暮らさうとの心であつた。――かういふ心理はやがて、我が國の情死の心理と大關係ある。他の機會で詳論しやう――。

是に於いて父親は、そんな無法な神樣には、もはや何物もお供へしなくなつた。又、決してお祈りもしなかつた。かくて此の日の午後も過ぎ、追々夕暮となつて來た。食ひしんぼうの神樣は、もう何か持つて呉れるかと、首を延ばして待つてゐるが、一向何の沙汰も無い。

其の夜も過ぎて次の日となつた。かの憐れな父親は、獨り死兒の側に臥して、飲まず、食はず、動かず、たゞ死期の近くを待つてゐる。戸口は閉めたまゝである。

神樣の方では昨日以來、餘つ程腹がへつてゐる。ひそ〳〵と二人で相談し始めた。

「カナロアさん。あのマルエはきのふから一寸も御飯を食べないし、アワの酒も飲まうとせぬ。イヤ、水一滴も飲みませぬ。あれぢや、命があぶないといふもの、若

しか、死んだとしたら我々も責任ある次第ぢやが、困つた事になりましたのう」

「おゝほんにカネさん。さうとも〳〵。してあの男は中々の好い人物ぢやつたが、あの事あつてからは、さつぱりお祈りもしなくなつた。我等の得意がなくなつたといふものぢや。實はあの時あんなに癇癪を立てねばよかつた。惡いことをしましたわい。いつもなら、朝も夕も、祈禱をするし、新らしい魚や、果實や野菜もお供へして呉れたのに。又あの黄色いアワから、アワ酒造つて飲まして呉れた。これを思へば、もう少し何とか考へてすればよかつたのう」

と。つまり二人の神樣は利己主義から割出して頻りと後悔してゐる。結局二人でマルエを見舞うてやつて、其の希望通りに子供の幽靈を探し當て、伴れて戻らせやうでないかと相談一決して、マルエの家へやつて來た。

「マルエさん〳〵。子を亡くなして淋びしいか」

「云ふまでもないこと、世に子供程可愛ものは御座いませぬ。」

「では、どうぢやな、一つこれから下界へ行つて、其のたましひを伴れ歸へつて、こゝに寢てゐるからだへ入れることとしたら？」

「イヤ〳〵、もう私は、此の世に望み御座いませぬ。一時も早く死んで、我が子の亡き魂を尋ね當てゝ、それから二人共々に、どこか別のよい處へ行つて末永く暮らしたう御座います」

「では早く下界へ下りなされ。我々は其の力を與へる程に」

と。此の一言聞いて彼は勇み立ち、食も取り酒も飲んで、うんと元氣をつけて、これから幽靈の居る下界へ指して旅立たうといふことになる。

神樣は彼に、其の乘り移るべき魄靈のからだと、並びに、竹の棒の如き空洞の杖を與へ、其の中へ糧食や、武器や、燃料とすべく、燒け燃えてゐる溶岩を入れてやつた。

此のホノルルから餘り遠からぬ處に、山脈中に連り入れる谿谷地や、小河や、湖の景色美しき里がある。古代の名をモアナルア（二つの湖）といふ。其の海岸に近く、

一つの名高き幽靈村がある。凡そ、幽靈となれば、オアフ島をさまようて後、必ずまづ此の里へ集まり、それから、愈靈魂のほんとの國なる下界、即、彼等の所謂ポ(Po)の國へ出發する事となるさうである。

此の幽靈の停留場に、幽靈のパンの木、レイワロ Lei-walo といふものがある。其の語は「八つの花環」又は「第八番目の花環」といふ意味で、つまりこれにはまだ人間の世の樹の葉があつて「亡者が目にし得る最後の花環となる」との心らしい。幽靈は皆、此の木の上へ登つて、其の朽ちたる枝が折れて海の中へ落ちる拍子に、ポの國へころがり込むのだといふ。マルエは此處へ到着して、此の樹へ攀ぢ登つた。案の定幾人かの幽靈が既に木の枝に上つてゐて、其の折れるのを待つてゐる處である。彼の重量は甚重かつたので、直ちに枝はへし折れて望み通りのポの國へ來た。彼は神樣が呉れた杖の中の食物を味へば新らしき命と、力とを得るのである。木の枝の上で一度其れを味つた。今や彼は、他のひよろ〳〵した案内者と別れて自分ひとり下界へ來り、

再び食物を口に入れた。愈々元氣になつた。

下界のボの衛兵は彼の入國を妨ぐべく、防戰した。彼は早速、不思議の杖を取り上げ、又其の中から神の利劍をぬき取つて左に右に敵を薙ぎ伏せ、斬り倒して、勇ましく突進して行く。又時には親切な幽靈も居つて、大に彼を歡迎することもあつた。行く〳〵己が愛兒を尋ねたが、とう〳〵ババクPapa-kuの下(ボの國の根城)に、於いて口の中にバナナを頰張つて、さも苦しげに息つまらせてゐる我が子を見付けたのである——こゝにも讀者は注意せらるゝであらう。彼等土人の思想は、肉身の口中に喰つた姿が矢張り幽靈としても同樣に現れて、窒息しやうとしてゐるといふのは、甚、論理に逢はぬ樣であるが、そこが彼等に見る所の共通の思想で、猶、喩へば、人が何か物を喰ふ幻影が地上に映じると、其の影法師も同樣に食事してゐると同じと見ればよからう。父は彼を捕へて上の國へ伴れ戻らうとした。然るに他の多くの幽靈は其のまはりを取り圍こんで、奪ひ返へさうとする。此の時父は又もや、あの食物をたべて利劍を

振うた。けれども敵は甚多數である。ワー〳〵ワーと押しかけ、ひし寄せる。こゝに殘りの一塊を食ひ了り、又、最後の手段して、杖の中から燒けたる溶岩(ラヴア)を迸出させた。火焰は今や幽靈國の樹林草叢の中に燃え上がつた。妖魔邪靈はさつと引き退く——この傳說にも、火の勢力と野蠻人の心理との關係を興味深く觀察し得るであらう——マルエは此の機をすかさず子供の神靈を取つて、杖の中へ押し隱し、大急ぎで上方の故鄕へと歸つて來た。

さて、まだ死骸として橫はれる、息子の身體の中へ、そのたましひを押し入れた。そして父子ともに嬉しく神前にお供へして、心の底から祈禱を捧げ、餘生を樂しく送つたといふ。

讀者は右の傳說中、甚、日本の神話其の他とも似通うた點のあるのを認められたであらう。例へば幽靈共が、父子の後を追つかけてくる所は恰も伊弉諾、伊弉冉兩神が黃泉比良阪で相ひ鬪うたと同じく、又、口中にバナナを含んで苦むは恰も佛家の說く

地獄の苛責とよく似て居り、又、火光を消魔の具とするは他の蠻人に見ると相類する事、余が右の本文中に注記した通りである。

尙、此の話に續いて幽靈王の許へ行つて、其の國を見物した物語を左に書かう。

4　幽靈國の見物

（布哇のマウイ島並びにラハイナ村の傳說）

昔、カ、イリオ、ハエ Ka-ilio-hae（其の文字の意味は、「猛犬」）といふ男があつて、永らく病氣して居つたが、とう〳〵昏睡の情態に陷つた。其のたましひは、左の眼から脫け出して、家の一隅で、蟲の如くにブン〳〵と云つて居つた。そして己が舊との肉體を眺めて見ると、まるで大きな山の樣に見えた。又其の眼は深き谿の如くに思はれた。こんなおつかないからだの中に這入つて居つたかと、つく〳〵愛想がつきて、家の屋根へ上つて行つた。——此等の思想は、我等の間にもある、靈魂が睡眠中に、

蠅となつて飛び出でゝ、奇夢を見たとか、又は亡魂が一七乃至七七日間、即、中陰の間、其の家の屋根に彷徨してゐると信ずる如きと比較すると面白い——カ、イリオ、ハエの家人は皆ワイ〳〵と慟哭し出したので、彼のたましひは、それがうるさくて、ココアナットの樹へ飛び乘り、恰も鳥の如くに其の樹枝に棲まつてゐた。さうすると、だん〳〵婆婆がいやになり、却つて、靈魂の世界が戀ひしくなつて、木から木へ、枝から枝へ飛び移りてケカアKekaa の方へやつて來た。ケカアとは、此のマウイ島の住人の亡魂が此處から、永劫に靈の國、即、地下の國へ旅立つべき最初の驛傳に當るのである。

カ、イリオ、ハエの魂靈が此の處まで來ると、ずつと以前に死んだ姉に逢うた。彼の女をアウマクア、ホーオラAumakua-ho-olaといふ。其の意は、「甦へらしむる精靈」といふ事で亡者のたましひをして再び肉體に歸還せしめ得る靈力を有するのである。これは一般に布哇人の幽靈思想に見ることで、既に早く死して今は地下の幽靈國に居

る祖先等には、此の力ありと信ぜられる。

姉の幽靈はカ、イリオ、ハエに向つて、暫く我々共の住家へ來て見ないかと云つた。尤も其の時に警告して曰く「けれどもね、若し私の夫が在宅して居つたなら、決してうか〳〵と其の勸めに從うて御馳走になつてはなりませぬぞ。實は我々共の家も食物も皆、實在の物質ではなくて、其の幻影であります。故に一度び之を攝取したら、もう二度と人の世に還る事は出來なくなるのです。ですからね、うちの人が、幽靈の御飯を食べ、又幽靈の睡り方を以て、寢てしまうたら、それから私共二人は、幽靈國を見物に參りませう、又幽靈の王樣にも面會なさるがよろしい」と。

姉の幽靈は斯う云つて、新來のカ、イリオ、ハエを、旋風(つむじかぜ)の丘へ伴れて來た。こゝには澤山の亡者が、ワイワイと、めい〳〵人間界で爲した遊戯を試みて騷ぎまはつてゐる。中には、「ヘエ、ナル」Hee-nalu (即、潮に乘)りに出掛けやうとしてゐるのもある。又中にはウル、マイカUlu-maika(圓い石磐を地上に轉がすこと)をしてゐるのも

ある。又或はモコ、モコMokomoko又は、ウマウマUmauma (即、拳闘)したり、クラクライKulakulai(相模)したり、或はホヌ、ホヌ Honuhonu (引張り合ひ)をなし、或はラウラウLoulou(指相模)などをしてゐる。

其他、生前博奕を好みし幽靈は各々、木の蔭に集つて頻りと賭け事をしてゐる。又、將棋に似たるコナネ Konane 磐の遊びがあつて、これは石で作つてある。プエプエオネ Pue-pue-one といふ遊びは砂山を築いて、中に何か隱しておくのであり、プヘネヘネPuheneheneとはカパKapaの積み重ねた下に石を隱すのであるが、こんなことをして勝負をしてゐる。又他の處へ來ると、多勢集まつて舞踏してゐる。どれもこれも皆、野外の遊戯である。

此の幽靈國に於ける一つの變つた事は、新參の亡者は甚、無力なもので、古參の者に一寸側方へ押されただけでも、フラ〳〵フラ〳〵と其の方角へ向いて行くやうになる。さればカ、イリオ、ハエの魂靈も、右の如き面白さうな遊戯を見て、自分も其の

仲間入りをしたさうに見えたが、姉から注意されて、また他の方へ押されて行つた。

今度は大きな草葺の家へ來た。此の中では多くの幽靈が愉快さうに騷いでゐる。彼は亦、此の遊戯團にも加はりたげに見え、幽靈共の群集は一時に押し寄せて旋風の如くに彼を取繞き、もう逃げ出させまじき勢ひである。其の時、彼の姉はポンと一つ脊を打つと、彼は不器用にもトットットッと其の方角へひよろついて行つた。

次に來た處は、これこそ幽靈國の王樣ワリアが住ふ宮殿で、廣い〳〵廣地に於いて石の壁を繞らせ、いと美しき草葺である。併し其の入口は狹き小路に過ぎぬ。姉は弟に向つてこれから一人でお這入りなさいといつた。そして色々の注意としては、「王樣の言ふことはよく聞いて、自分からは餘りしやべらぬ樣に。又成るべく早く出て來ること。此の細い入口には三人の門衛が居るが、まづ第一のものは、お前の木の實（望みのこと）は何かと聞くだらうから、たゞ一言「ワリア」Waliaと答へよ。其の次の衛士は「なんの爲にこゝへ來た」と聞いたら、又「ワリア」と言へ。第三番目の守衛は、何も云は

ず、むずと槍を突き出して、今や突き通さうとするに違ひないから、其の時は「カ、マケ、ロア Ka-make-loa（大死）と呼べ。これは其の槍の名である。然らば「何用ありて」と向ふが言ふ。お前は「お頭に逢ふ爲に」と返事せよ。すればお前は中へ這入ることが出來やう。斯うして行くと、又大きな家の戸口に來る。此處には二人の隊長が居つて、蹲踞んでゐるから、通行出來ない。其の時お前は、兩腕をズーッと前へ突き出して、サッと左右へ、彼等を押し開け。そしたらアラ、ヌイ Ala-nui（大門）が開かれて、通行が許される。けれども若し此の際、今のお呪ひを知らなかつたら、すぐさま彼等に引捕へられて、ポ、ミル Po-milu（闇黑の幽冥國）へほうり込まれてしまうから、よく覺えてゐなさい」と姉は注意した。

更に彼の女は語る。「中へ這入れば、幾つかのカヒリ Kahili とて長い羽毛の扇が王の身體を煽いでゐる。お前が行くと、王は目を醒まして、「何用ありて、旅の者は來たか」と聞く。するとお前は「尊影を拜すべく」と言ひなさい。乞度、何の罪も受けない。

よく以上に教へたことを覺へて居れば、また生き歸ることが出來る。さあ行きなさい」と言つた。

カ、イリオ、ハエは進んで行くと、果して、一々姉の言つた通りの順序に色々の誰何を受けたが、甘くやつてのけたので、番兵はノア Noa（苦しうない）といつて、通行を許した。愈々最後の誰何も通過して、中へ這入り、カ、イクワイ（中央）へ進み行き、兩手、兩膝を床上に突きてお辭儀をした。王の從僕共は、羽根扇カヒリを、フワリ〳〵と煽いでゐる。尤も幽靈國だけあつて、行動は見えるが、ちよつとも音がしない。

やがて王は目を開いて、「アロハ、Aloha 他處の人、もつと近う。お前の酋長は何といふか」と聞いた。カ、イリオ、ハエは其の名を告げ、且、祖先の系圖を述べた。

王の后も目を醒ました。見れば此の國では未だ嘗て見た事のない美しい婦人であつた。彼はまた丁寧に最敬禮をした。王は彼に向つて、もう早く人間の國へ戻つて、己が肉身に還れ、又、お前の國人に、近く災禍があるから氣を附けるやうに豫告せよと言つた。

斯く彼が王の前に居る間に、二度、臣下が來て、遊戯は皆濟みましたと報告した。若第三度目の報告が來たら最後、石の扉は閉ざされてもはや此の中に居るものは再び逃れ出で得ず、眞闇な處へほうり込まれねばならぬのである。

門前に待つてゐる姉は今や氣が氣でない。遂に自ら中へ這入つて行つて、弟を捕へ、大急ぎて外へ引張出した。其の時丁度、第三報が來た。危機一髪の處であつた。

澤山の幽靈は、今まで海で遊んでゐたのも、木の蔭に戯れてゐたのも皆一樣に中へ歸へて行く。すると、一人の若い美しい女の幽靈が立つてゐた。それらの男幽靈に向ひ、「ね、あなた達、私の家へ遊びに入らつしやいな」と招いてゐた。其の指す處は、一つの岩の上で、其處に澤山の小鳥が棲まつてゐた。

カ、イリオ、ハエの姉は急いで弟を伴うて、己が住處、即、海岸まで引つ張つて來た。姉は此の幽靈國の關所を見張するのが其の役目であつた。

姉は弟に、幽靈國見物を終つたから王の言葉通り、早く自分の體へ歸れと勸めたが、

彼は幽靈の國のさも面白さうなのが氣に入つて、元の國へ歸へるのはいやだとて逃げ隱れやうとした。併、姉はそんな分らぬことをいふ者ではありませぬと、なだめ又叱りつゝ、其の舊宅まで伴れて來た。家の一隅に穴が開いてゐたから、其處から弟の靈魂を押し込んだ。弟のたましひは、自分の舊屍を見て、大變怖しがつて又もや逃げ出さうとしたが、再び姉の手に捕へられて、とう〳〵無理やりに足の方から膝からへ向けて、たましひを押し込み、押し上げた。弟は、自分のからだの臭いのがいやであつた。いろ〳〵と反抗しやうとしてゐるうちに、とう〳〵姉は弟の足をしつかりもつて、身體を振り動かしたら、たましひも頭の中へ收まつた。

さうすると、家族は、まづ彼の口の中に微かな音を聞き、又胸が呼吸で動くのを認め、やれ息を吹き返へしたなと知つた。乃、身體を煖め又、少量の食物も與へて、やがて身體はもとの健康に復した。此の幽靈國見物は、かくして彼が皆に語つたものである。

尙左に日本の諸傳說を見やう。

二　日本の幽靈傳說

1　詞をかはせし磔女

武州河越の住人入間和田左衛門仕官を辭して、暫く閑居せし頃、秩父へ立ち越え、夜に入りて荒川の岸陰に佇み、道に遲れたる一人の僕を待合はする所に、その邊にかゝる逆磔（はりつけ）の女、木の空より這ひ下り手にて步み、和田左衛門が前に來りて、御自分ならで世に賴む方なし。此川を負越し向ふの家の門に張りたる祈禱札を剝して給はれといふ。和田左衛門少しも驚く氣色もなく、今向ふより川を越して來りし者なり。あとへ戻らん事いとむづかし、今に向ふへ行く者來るべし、それを賴めといへば、女涙を流し余の人は我姿を怖れて近づかねば、詞を替すべき便りなし。たま〳〵人界に生れきたりて、又修羅道に永く沈む苦患を助け給はれとかき口說きけるに、哀れを覺え

ていざとて後を向けければ女嬉しげに身を取り直して肩にかゝりぬ。臭く穢らはしき亂れ髪、和田左衛門が顔に覆ふ、心ならずも川を負越して、かの家の前に下ろし、門の札を剝がすれば、此女うち笑み、家に入るとみえしが、忽ち家内騒動して、やがて女の生首をくはえて、始の川を越すと見へぬ。和田左衛門興醒ましながら、又川を渡りける所へ、最前の磔女現れ出て、御蔭にて本望を遂げ忝けなき事詞に述べがたし、我もとかの家に召仕はれし者なりしが、主と心を通はすと疑がひ、女主の計みにて無實の罪に身を墮し、かゝる苦しみの死を致し、二世の罪を植る瞋恚の恨み今宵本望を遂げたる事御恩淺からず此一念の力をもつて御返禮申すべし。望み給へといふ。我、亡魂の禮を請くべき所存なし。然れども汝に頼まれて人の命を取たれば罪障如何ばかりにあらん。是を初發心として世を捨て彼者の菩提を吊らはんと思ふの外なし。我に厚恩の古主あり。もし汝が志空しからずば、その御方の武運を守れと申ければ畏こまり諾して消へ失せぬ。和田左衛門はそれより剃髪染衣の身となり、一と歳津の國長

柄の片里に暫し行脚の笠を脱し祖寛法師となりしとかや。かの肥前島原一揆の時、逆磔の影、ある備の旗に映りたる武士譽をとりたる事かくれなし。その子孫相續きて今に端午の幟に此旗を飾りけると聞傳へぬ。しかればかの女の如くならば世に幽靈といふもの極まつてあるものにや。答へて曰く惣じて萬物の上に常と變の二つあり。悉しく愚作の獨鈷鎌論といふ書に述べたれば、爰に略す。今此不審につきていはゞ平生底の人氣衰へ形つかれ、生老病死と次第して死する人は火の自然に消えて其の灰にも暖かなる氣のなきがごとし是常といふものなり。變死は人を恨みて死に或は鬪諍、劍戟、中天、禍害によつて死するものは、其の氣も形もいまだ自然と衰ろへずして卒爾に死するより未だもへる火に水を懸て消たる時、暖かなる氣暫く殘るがごとし。猶その火その氣の强弱によつて、其の殘る品にも淺深厚薄あるが如し。天地の間より生ずるもの皆氣より起れり。此氣の滯る時形を生ず。假令は煙の形あれども手にも取れず、少しも色相の物にさゝはる事なしといへども、積りて煤になり

たる時は、手に取らるゝが如し。是れ氣は質のはじめなり。その氣滯こほりて形をなし、聲を生じ、黑白黃赤の色相を顯はす物を名けて幽靈といふ。是變といふ名義なり。善をなす者は善の氣凝て善處に形を顯はし、惡をなす者は惡の氣凝て惡趣に墮るといふ佛說も又宜ならずや。

2　慇懃なる幽靈（一夜船より）

二條の何某、越中受領の時、家中に化物屋敷とて住人なく、主人打續き橫死したりけるを、勝浦彥五郎、此屋敷を望みて住みけるが、げにも世の取沙汰にたがはず每夜前栽の邊りを徘徊するものを見れば、袴を着したる男の怪しげなる形にて、さのみ人に恐るゝ躰にもあらず、袴幽靈といふこそさる事なれ。何者ぞといへば行衛なく見失ふこと度々なり。ある夜春雨降續き淋しきに朧の氣色見んと雨戸を開て梅の移ろひを惜みしに例の男築山に佇みぬ。彥五郎早くことばをかけ、なんぢが事かねて聞及びたり。此屋敷に住ゐ致させる上は家來同前に思へば少しも遠慮なし。今宵徒

然なれば內へきたりて伽仕れといはれて、此者畏こまり候とて會釋なく座敷へ入來る。男ぶり爽なるが年は三十ばかり、尾も見へず毛も生ぬ常躰の人間に變る事なし。初對面ながら按摩を無心申すといへば、後に廻り手輕く療治奇妙、玄朴に勝りて氣味よし。さるにても汝は正體何者ぞ。ありやうに語りて向後は每夜心安く出入り遠慮なく仕れといへば、幽靈答へて最早お屋敷に罷りあるも今宵ばかりなり。そも〳〵私儀は此屋敷三代先の福見彌藤太家來、可右衛門と申す者なりしが、主人傍輩の內の娘美形と聞て妻に申かけしに、先樣不同心なる事を怨み、闇討にせられしを拙者ならで知る者なかりしが下郎のこんじやう心元なく存ぜられしにや、故なく手討にあいて相果てぬ。段々非道なる上、さりとは主人とは存じがたくと、怨みの一念殘りて彌藤太を取殺し其の子をも殺し、其の子今江州にあり。今宵矢橋の渡りにて丸太舟を乘沈め、乘手七人助かり、三人は水に溺れ死する內一人彌藤太が孫なり。今は讐の根を斷ちて怨むべきものなし。されば迷魂は火の如く業力は油のごとし。油つきて火の消

るが如し。今は妄執晴て怨むべきかたなし。念なければ形生せず。かの手討にあへる時、袴を着したれば是の如き姿を離れずと語りけるを彦五郎聞て寢入しが、お暇申すを返り見れば、早消へ失にける。そのあけの夜より再び幽靈來らず。彦五郎不思議に思ひて江州の便りに聞けば、月日も變らず矢橋の渡りにて三人溺れ死にけるよし、彌藤太が孫まで取殺しけん。善惡の因果はながく子孫に傳へて業を果す事、昔より夥多見えたり。一念五百生あら恐ろし。

3　成田治左衛門與二亡妻一同二枕衾一

享保年中大阪谷町邊に住める浪人あり。もと西國かたのさむらひなりしが、故ありて國を立ち退き大阪へ來り、新蔭流の武術を指南して活計をなす。後妻をむかへたりしに夫婦の仲むつまじく實に瑟琴をひくがごとくなりけるが、彼妻ふと風のこゝちにて、例ならざりしが、しだひに病氣おもりて今はくすしのたすけも便りなかりければ、治左衛門大になげきて日夜枕もとをはなれずかなしみけるがしだひに飲食も

喉に下らず、命も旦夕に迫りしに治左衛門を呼んで手を取り、顏うちまもりていふやうは、君と酬酒をくみかはしてより、互ひに百年もそひまいらせんとちぎりしに妾不幸にして中途に別れまいらせん事其かなしみいふにつきる事なし。若君妾をすてたまはすば、例ひ形骸はむなしくなりぬとも魂魄はこゝにとゞまり、君と偕老のちぎりをなしまいらせ申さんと、なみだと共にいひければ治左衛門も共になげきて汝より生きのこる我悲しみ腸を斷がごとし。しかれど有爲轉變の世のならひ、なげきてもかひなし。若其の言葉たがはすば、猶死しても生くるに同じといひければ、妻うちゑみて世に嬉しげなる顏して、幸に君のすてたまはざるを辱なふす。しかし他にもらし給ふ事勿れといひていき終へたり。治左衛門大になげきかなしみけるが、かくてもあられざれは形骸を寺へ送りて葬埋の禮をなしけるが、その夜より妻來りて治左衛門と枕を同ふして生ける時の如く、すこしもかわる事なし。はじめのほどは愛着に溺れて何とも物おもはざりしが、日數かさなるにしたがひ、心よからざる事に思ひて其

の知己門弟へは播州回りと披露して、播州しるべの方へといたり避ければ其夜又妻來りて君妾とふかくちぎりたまひて今心かはらせたまふ事こそ怨めしけれ。君何方へいたりたもふとも日本はおろか支那印度までもしたがひまゐり申べし。君妾をすてたまふとも、妾君をすてまいらせまじといひて其の來る事なほやまず、せん方なくてまた大阪へ歸りけるが、是をさくるに術なく又他にもらさじと契りしことなればロ外せんもおそろしくてたゞひとりもたへ苦しみけるが、次第に氣おとろへて人にもあはず、引こもり打ふし居たりけるが朋友四五輩治左衛門がやめると聞て訪ひ來りしに奴婢、人に會ひたもふ事を嫌ひけるよしを告げけるに皆武を專らにする者共なれば兒女子のやめるごとく人に逢ふをきらふ事何ぞや、われらはくるしからずとおして治左衛門の病床にいたりければ、治左衛門おどろきなみだをながして我はからずも疾をうけてすでにせまれり。公等に對面せんもはやこれぎりなるべしといふ。其の形體肉脆皮焦氣息短急なり。みな是をみるに其の相ごう、いと奇怪にして鬼魅

のわざはひせるがごとくなれば、必怪事あるべし、つゝまず次第を語るべしと懇ろにいひければ治左衛門も、うち明け始末を吐かんと思へども婦とかたくちぎりしに人に語るまじといひしことなればいかゞせんと狐疑猶豫せしに、再三聲をそろへて問ければせんかたなく婦とちぎりし始終を語りければみな驚きいふようは、是足下愛着のふかき故、狐狸わざわひをなすとおぼへたり。死したる人の再び來らんいわれなし。幸に我等の居るあり除かずんばあるべからずと、其夜、光燭をやきてあたりも白晝のごとく、みな治左衛門のかたはらに連座して、今や妖怪の來るかとまち居たりしに夜半の頃治左衛門苦しみ悶へければ、みな今こそ妖怪の來りけるよと刀をぬきて空中を拂へども當るものなく、また怪しきものも見へざりしが、治左衛門つひにたへ入たり。皆驚きたすけて藥など與へしによふ〳〵にしていき出でたり。治左衛門なみだをながして我れ公等に言をもらせしを婦大に怒りて我命をたゝんといひて歸れり公等幸に千萬歳を保たまへといひて、終に其明日死しにけり。實に奇怪の事なりとか

や。古より聲色に沈湎して其怪妄を信じ、正心を失ふもの漢武帝唐の玄宗の類少なからず、人心もと不味にして明らかなりといへども、物欲これをおふときは終に其明を失す。聲色の物欲より甚しきまたさらなり。松崎惟時小説に一武人の子、猫を殺して是が爲になやまさる。其の伯父のはかりごとにて終に其のまよひはれしことを記されたり。治左衛門の友みな武を好みて學術なし、おしいかな終に彼を迷死せしむることと、實にあはれむべし。

而て、最も古くして、且、有名なるものは菅公の幽靈である。余は其の傳説をば、別項「幽靈の歴史」の中に書いたから、左には之を謠曲に脚色したる「雷電」より引かう。文章としては此の方が面白い。

4　菅丞相、比叡山に法性坊を訪ふ（ワキは法性坊シテは菅公）

（ワキ詞）「深更に軒白し。月はさせども柴の戸を、敲くべき人も覺えぬに、如何なる松の風やらん。（謠）あら不思議の事やな。（シテ詞）「聞けば内にも我が聲を、怪しみ人の

咎むるぞと、（謠）重ねて扉を敲きけり。（ワキ詞）「餘りの事の不思議さに、物のひまよりよく〳〵見れば、是は不思議や丞相にてましますぞや。心さわぎて覺束な。（シテ詞）「頃しも今は明けやすき、月に引かれて此の庵の（謠）樞を敲けば内よりも、（ワキ謠）「不思議やさては丞相か、はや此方へと、（シテ謠）「夕月の（地謠）「影珍らしや客人の、影珍らしや客人の、まれに逢ふ時は、なか〳〵夢の心地して、いひやる言の葉もなし。上人も丞相も心解けて物語り。世にうれしげに見え給ふ。あはれ同じ世に逢瀬と是を思はめや。逢瀬と是を思はめや。

（ワキ詞）「さて御身は筑紫にて果て給ひたる由、承り候程に、種々に弔ひ申して候が、屆き候やらん。（シテ詞）「なか〳〵の事御弔ひ悉く屆きて有り難う候。」

以上の四例は孰れも最初から變化の者と知られてゐた種類である。之に反して全く幽靈なることを察知せしめざるもの、やつと最後になつて、それと分つたり、又、先方自身が語り出づる事により、又は多少時間も經過して後、さては幽靈なりけるかと驚

く如き例もある。余が「たましひ」の第一五八頁に引きし「蕎麥を食うた幽靈」もそれであるが、左に近世説奇聞卷の三から引例しやう。

5　亡魂改葬を願ふ

東城の南にあたりて、何がし寺といふあり。土地高うして海原はるかに目をきはむればそこともしも限りしられず、水盡南天不レ見レ雲、雲居にまがふ沖つしら波などいひけんにて舟の帆影見えつかくれつ、雲に入るかと疑はれ、近きはつりたれ、網ひく舟などあまた木の葉のちりうくやうに數しらず、東は上つふさ、下つふさ、安房につゞける山々かすかに水上にうく流かとあやまたれ、左のかたは中島の梢立ちならび、みやこ鳥ありやなしやは見えねども角田川のながれ近く、晴れたる日にはつくば山もよく見ゆ。春のゆふべ、花ぞちりけるとよみし入相の鐘に心をすまし涼しき風に夏をわすれ、望のころしも出る月はたゞちにかがみにむかふ心ちして、つもれば人の老となるてふこともおもはず、雪の晴たる夕くれは興つきて歸るともいひつべき舟

も見ゆ、いにし年故ありて此寺にひと夜やどりしに明ぼのゝ氣しき、さらにいはんかたなし。日のさし出るほど、よそにて見るべくもあらず。かゝる風景あれば一たび來り見し人慕はぬはなし。それが中にあるやごとなき人の母君たま〳〵こゝにまうでたまひし事ありしに、此景色に心を殘し我世になくなりなば、此寺へこそ來らめと常にのたまひしが、心ちわづらひて今はの時に子なりける人を近づけ、我死しなば常にいひし如くこの寺に葬れよ、くれ〳〵頼むぞといひおきて程なく身まかりたまひぬ。しかるに其の家先祖より父に至るまで、世々葬りし寺あれば、それをおきて他の寺へをさめん事遺言とはいひながら安からぬ事なればとて、今までの香花院へおくりしに、其の夜常に慕はれし寺のとぼそを敲く音す。寺僧立ち出で誰なるぞとひければ何がしが母に侍り、和尚へ御めにかゝり申たきこと有て來れり、其のよし申てたべとあり。此僧此婦人の事をば豫て知れり。つねにはのりもの、侍、侍女、婢などあまた具せらるゝに今夜は只獨來たまふ事不審には思ひしかども、和尚へかくと申け

れば、和尚も夜中に婦人一人來りて、我にあはんとは心得ぬ事とは思はれしかども、よし何にもせよこなたへと申せとて、やがて出むかへ客殿へ招じいかなること有て夜中には來りたまひしやと問れければ、みづからは此世をさりし身なり、死せし後は此御寺へこそ參らめと、つねに願ひ侍りし故いまはのきはにも一向其の事のみをいひ置きしに、みづからが望みにまかせず、子なるものゝ寺へ葬たり。此の事冥途の障となれば、ねがはくは子どもの方へ此よしを告たまひ、早くこの御寺へ改葬給はれかし、かへすゞ〳〵も頼みまゐらするなり。此事申さん爲にこそ、これまで參りつれとありければ和尚聞て仰尤には候へども、當寺へ移し候はん事こなたより申出さん事いかゞなり。たとへ申出したりとも是まで御出ありし事よもまことゝは思ひたまはじ、さりながらまさしきしるしとすべき物あらば、聞入れ給はぬまでも申出し候はんと答られければ、さらば是をしるしにとて、うは著をぬぎてわたされしをとるかと思へば夢のごとく、有つる姿は見えずなり。小そでは和尚の手にのこれり。

和尚奇異の事に思ひ夜の明るを待ちて、とくかの婦人の子息のもとへゆき、詳しく語られしに主人を始め、家内の人々思ひ合する事共有しかは葬し寺へことわりをいひてすみやかに改葬せられけり。家中に其の時の人いまにながらへ居たるもあり。此寺へまうづるごとに追善の念にや必此事を語りて寺僧に聞かせけるとて予のしれる僧の語りしなり、奇異のことにおもひて、其の僧をたのみてかの墳墓へゆきて見侍りし。

6 菊花の約

こゝに掲ぐるは、有名なる雨月物語の一章である。其の發端を略說せんに……もと、出雲の國松江の住人赤穴宗右衛門なるもの、兵書に明かなるを以て、富田の城主、鹽冶掃部介の師たり。鹽冶は守護代にして、出雲全國は近江の佐々木氏綱に屬す。事ありて宗右衛門は密使として近江に到りし間、掃部は敵黨の夜討に遂ひて亡ぶ。宗右衛門は佐々木に之を平定せんことを奬めしも、容易く決行すべくもあらず。却つて宗右衛門を永く返まらしむ。乃、彼、故なき所には永く居らじと、竊かに逃れて歸國に就ける途次、播磨の國加古の

驛にて大熱病に逢ひ、偶々、清士、丈部左門の手厚き看護を以て病癒ゆることを得たり。爾來、赤穴宗右衛門は五歳長ずるの故を以て義兄となり、互に心肝を照らして眞の骨肉も及ばず。……偖、これから原文を抄出しやう。

「きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはて、、涼しき風による浪に、とはでもしるき夏の始になりぬ。赤穴、母子にむかひて、吾近江を遁來りしも、雲州の動靜を見んためなれば、一たび下向て、やがて歸來り、菽水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。今のわかれを給へといふ。左門いふ。さあらは兄長いつの時にか歸り給ふべき。赤穴いふ。月日は逝きやすし。おそくとも此秋は過さじ、左門云く秋はいつの日を定めて待べきやねがふは約し給へ。赤穴云、重陽の佳節をもて歸來る日とすべし。左門いふ、兄長必ず此日をあやまりたまふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待たてまつらんと、互に情をつくして赤穴は西に歸りけり。あら玉の月日はやく經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶やかに、九月にもなりぬ。九日はいつも

よりも蚤く起き出で、草の屋の席をはらひ、黄菊白菊二枝三枝少瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設けをす。老母云ふ。かの八雲たつ國は山陰のはてにありて、こゝには百里を隔つるときけば、けふとも定めがたきに、其來しを見て物すとも遲からじ。左門云、赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其の人を見てあわたゞしからんは、思はんことの恥かしとて、美酒を沽ひ鮮魚を宰て厨に備ふ。……午時もやゝかたぶきぬれど、待つ人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心醉るが如し。老母左門をよびて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色こきはけふのみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥もして又翌の日を待つべしとあるに、否みがたく、母をすかして前に臥しめ、もしやと戸の外に出で見れば銀河影きえ〳〵に氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼る聲すみわたり、浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉て入らんと

するに、たゞ看るおぼろなる黒影の中に人ありて風の隨々來るをあやしと見れば、赤穴宗右衛門なり。踊りあがるこゝちして、小弟蚤くより待て今にいたりぬる。盟たがはで來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせたまへといふめれど、只點頭て物をもいはでである。左門前にすゝみて、南の窓の下にむかへ、座につかしめ、兄長來りたまふことの遲かりしに、老母も待わびて、翌てそと臥所に入らせたまふ。寤させまゐらせんといへるを、赤穴又頭を振てとゞめつゝも、更に物をもいはでぞある。左門云、既に夜を續ぎて來したまふに、心も倦み足も勞れたまふべし。幸に一杯を酌みて歇息たまへとて、酒をあたゝめ下物を列ねてすゝむるに赤穴袖をもて面を掩ひ、其の臭ひを嫌放るに似たり。左門云、井臼の力はた欺すに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふことながれ。赤穴猶答もせで、長嘘をつぎつゝ、しばししていふ、賢弟が信ある饗應をなどいなむべきことわりやあらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぞなり。必しもなあやしみ給ひそ。吾は陽世の人にあらず。きななき靈

のかりに形を見えつるなり。左門大に駭きて、兄長何ゆゑにこのあやしきことかたり出給ふや、更に夢ともおぼえ侍らず。赤穴いふ、賢弟とわかれて國にくだりしが、國人大かた經久が勢ひに服て、鹽冶の恩を顧るものなし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。假に其の詞を容て、つら〳〵經久がなす所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練といへども、智を用ふるに狐疑の心おほくして、服心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることをかたりて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂に今日にいたらしむ。此約にたがふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。いにしへの人のいふ。人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆくと。此ことわりを思ひ出て、みづから刄に伏し、今夜陰風に乘りてはる〴〵來り、菊花の約に赴く。此心をあはれみ給へといひをはりて。泪わき出るが如し。今は永

きわかれなり。只母公によくつかへ給へとて、座を立つと見しが、かき消えて見えずなりにける。左門慌忙とゞめんとすれば陰風に眼くらみて行方をしらず。俯向につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大に哭く。

三　いろ〳〵の幽靈型式

成るべく趣構の變つたる、複雜な幽靈譚數編を左に掲げやう。第一に出すのは猿著聞集の二にある物語である。

1　白川なにがしが家の幽靈の事

「みちのく白川のほとりに住みけるある武士の子にて、心ざまいと雄々しく萬づの業にも疎からぬがありけり。としごろになりければ善き妻をも迎へまほしく父は媒を頼みて、求めけれど緣なくて打過ぐしぬ、同じわたりに賤しき者の女にて顏形いとめでたく心忠實やかなるがありけり、此のをの子いつしか語らひ逢ひにけん、淺

からぬ中となりて折々忍び逢ひにけり。さるを誰かは親につげにけん、父殊に打腹立たりければ、心ばみたる人媒ちして父にも兎角云ひ扱ひ女の母にもよくかたらひあはせてかの女を側女とはなしにけり。次の年女みごもりて男子を生みけり。而て後女の母なかだちがり行ていふやう、はじめ側女になゐらせし折をのこ子生みたらんのちはまことの妻ともなしたまはんと、固く契らひまゐらせたれば、こだみは妻にこそすゑてたまひなめ、それもなくはとくかへしたまはれとぞせがみたる。なかだちの人もせんすべなく男の父にかくとつぐるに父いたく怒りていふやう見るごと賤しき者の女まことの妻とはなしがたし、かへせとあらばかへさんに何かは難き事あらん。とく〳〵伴ひ行けかしと、にが〳〵しうぞ答へたる。親々の心斯うなりければ男も女も詮術なく泣く〳〵別れとなりにけり。母は女をこと人にあはせまく思ひ人を語らひさる方に縁を求め、あすときはめてしるしをも取入れんとしけるにぞ女は否みて打嘆き百歳側女に果つるとも、馴れし夫子ぞ戀しきをと一向こがれにけり。